

なみくの鋒鋦は逆も叶ふまじと、おのれが卑怯を覺悟の前に飛び出して斬り付けしが、南無三寶、初太刀を仕損ぜし今更の絶對絶命、もはや死物狂ひの二の太刀を取り直して詰め寄りぬ、

「長衛、おのれほどの男に油断ない筈、闇討に人違ひの卑怯で無いぞッ」  
長右衛門、おもはず首肯いて、にこりと微笑を浮べぬ、

「や、その一言で今の卑怯は消えたぞ、いざ西川又八郎、随分と心残さず働け、眼前に兄の仇ぢや」

犬の糞に踏み込つてさへ忽ち人垣を築く江戸繁昌の白晝、それ斬合、決闘、いや仇討と叫ぶ聲々に四方より黒山の如き見物、ぐるりと取巻きし中央に雙方の生死を争ふ晴の勝負業、長右衛門は顔色淺黒き大男に面上の太刀疵、さらぬも物凄き眼の光輝、大地に根を持つが如く身を構へて、あくまでも悠々たる不敵の體、こゝに西川又八郎は

色白の優形に血氣の若輩、はや眼中に血筋を注ぎ大息を吐いて足場も輕き體、まして兄の仇討といへば、誰が目にも憎まるべきは長右衛門、あはれに見ゆる又八郎の背後より見物おもはず関を作つて勢援を添へぬ、

されど長右衛門さらに自己より進んで太刀を下さず、たゞ必死に斬り込む又八郎が白刃を前後左右に打ち拂ふのみ、その疲勞を待つて今日の一度は助けやらんとの情を、また見物中に武士の目早きもの、おもはず感嘆の手を鳴らしながら呼ばはりぬ、

「あまり出来し過ぎては過つぞ、踏ん込め踏ん込め、太刀打に容赦があるかッ」  
敵味方、いづれの聲も耳に入ればこそ、もはや叶はぬ捨身の又八郎、生命と叫ぶや否、閃く白刃もろとも胸先を覗ひつゝ五體を躍らして突き入りし鋒鋦、さても念力の怖ろしや、ひらりと飛び退く長衛が左の二の腕を削るが如く劈きぬ、  
や、こいつ面倒なりと翻りし長右衛門、片脚あけて又八郎を蹴飛ばせば、さらぬも

疲れ果てし脛腰、よろくとせし眞正面より寸隙もなく踏み込んで、梨割の大袈裟に斬り倒すかと思ひの外、一刀の柄頭に額口を叩き割って打ち倒しぬ、

## 其二十三十一

あまり出来し過ぎて不覺を取るな武士の太刀打に容赦はないぞと、見物のうちより叫びし一言に、果して右の二の腕を劈かれし高倉長右衛門、や、面倒なりと踏み込んで大刀の柄頭に敵の眞向額口を打ち割れば、さらぬも勢れ果てし西川又八郎、仰天さまに顛倒して氣を取失ひぬ、

黒山の如く人垣を築きし見物、おもはず聲をあけて動揺めく中より六十前後の一僕を召連れたる武家、靜に歩み出でて會釋しながら、氣絶せる又八郎を自己が家來に介抱せしめ、その身は長右衛門の傍に立寄りつゝ、腰印籠より取出せし金瘡の練藥に幾重

の懷紙を添へて與へぬ、

「やれ美事の御働き振、御療治までの間まづ差當ツての血止ぢや、さして急所でもないけに存ずる」

長右衛門、一刀を左に持ち替へて、劈かれし右手を其のまゝ空に押戴きぬ、

「いづれの御方やら、思召、厚く受けまする、鋒鋦の外れ疵、たゞ皮肉少々ばかりの事ながら、只今お言葉の通り、いかに油斷大敵、此不覺を取りましたぢや、はゝゝゝ」

さても怖ろしき男ぞ、死生を争ふ間一髪の耳の底へ、山の如き見物中より叫びし我が音聲を聴き覺えしかと、いよく呆れて其顔を打守れば、長右衛門、慇懃の腰に打ち屈めて靜に又八郎を指さしぬ、

「聊か頭骨を痛めし筈、あれ御覽ぜよ御家來衆の介抱では届きかねまする體、さりとて敵の我手に蘇生いたしては嗚や本人の無念心外、御苦勞ながら幸ひ貴方様、あれ

へ御手を」

「や、どこまでも出来された御人、なるほど相手方は氣絶ぢや」

主従もろとも又八郎の前後より介抱する間に、長右衛門、一滴の血の氣も濡らさぬ太刀を鞘に納めて柄頭を袖に拭ひつゝ、自己が二の腕の疵口に煉藥を展べし幾重の懷紙を押當て、下緒の端を口に咬へながら、ぐるぐると簀卷の如く巻き立てぬ、

やうく氣を取直せし西川又八郎、はつと始めて心付くや否、前後の主従に一禮の頭を垂れながら、血走る眼を見開いて岸破と起き上りぬ、

「いづれ様の御介抱か、かゝる折柄、御免なりませ、いざ長衛まだ生命はあるぞ、勝負、勝負」

長右衛門、悠々と歩み寄りて微笑を浮べつゝ、その面前に立塞がりぬ、

「又八これ見よ、この二の腕を天晴れ確に突き削つたぞ、加之も我より先手の一太刀

みごとに来たぞ、大の手柄ぢや、但し其の額の打疵は次第に日を逐うて頭骨へ染み込む筈、急くな、急くな、ゆるく療治して來よ、生死の勝負は後日あらためての事、宿は上野寛永寺の寺中にて常照院、踏み込まば身のためならぬ場所ながら、いつなりとも呼び出さば罷り出るぞ、兎も角も今日は幸ひ、それに在せらるゝ御主従を時の氏神として、このまゝく」

## 其二十二

木戸口より不意に飛び出して名乗もかけず打ち込みし卑怯の振舞、もし外の奴ならば一刀の下に兩斷すべき筈なれど、かくせずば迎も叶はぬ我に斯くせし業といひ、加之も兄の仇といふ殊勝さに今日の一度は助け置くべき心體、あまり待遇ひ過ぎて思はず右の二の腕を劈かれながら、なほしも敵に其場の花を持たせて天晴れ先手の一太刀み

ごとに来たぞと言葉を添へ、後日のため自己が宿所を打ち明けし上、見物中より飛び入りし介抱の主従に慇懃の禮を施せし體、どこまで膽魂の落着いたる男ぞ、さては忘れず捨てし編笠も拾うて行くかと思ひの外、じろりと斜めに打ち見たるのみ、今更ら心付けば武士の頭に大地の塵埃を戴かぬ顔色、たゞ大膽にも脱ぎ捨てざりし草履ばかり其のまゝ、軽く足の爪端をあけて砂を振り落しつゝ、さらぬも面上の疵痕ありありと歩み出す物凄さに、山の如き見物おもはず人雪崩を打つて道を開きぬ、

長右衛門、そのまゝ見返りもせず悠々と立去りて、幸ひの途上、黒門前の醫者に疵口の療治をさせし後、宵闇の小石に躓きしほどの顔色もなく、例の反身に脇目も觸らぬ大兵、のツそりと上野山内の常照院に歸りしが、折しも玄關脇の芝生に小僧四五人が丸裸となりつゝ、相撲の體を見るや否、はゝと笑うて傍の切株に腰うちかけつゝ、巾着の鳥目、がちやくくと探りぬ、

「やれ面白いぞ、傳へ聞く釋尊は丈餘の御身丈あつて自然の力量は道を塞ぐ大木そのまゝ、押退けられしとやら、佛者佛力金剛磐石、菩提も悟道も肉身の骨節達者でなうては叶はぬ筈、組め、あらんかぎりの勢ひ込んで組めよ坊達、末世の經讀んで味噌するばかりが勤務で無いぞ、この高倉が時に取つての勸進ぢや、ちと足らぬ勝ながら貧乏巾着の底を叩いて喜捨の檀那とならう、はゝゝゝ」

浮世知らずの小坊主ども、眼前の慾には我を忘れし煩惱の力足、おもはぬ不意の勸進を得て瀧津瀬に弄ばるゝ手鞠の如く飛び上り跳ね上りつゝ、味噌する腕に豆腐腹の一生懸命、息をもつかず大汗となつて組み付き投げ合ふ呵しさに、長右衛門いよく聲をあけての高笑ひ、

「それ其處ぢや、踏み込め、飛び退け、頭を入れい、腰を落せよ脛を搦めよ、やれ残つた、南無三、してやられた、はゝゝゝ、新手ぢや、新手ぢや」

巾着の烏目さらに一文も餘さず投げ出して、今日の勸進相撲まづ千秋樂と笑ひながら、いち／＼小坊主の頭を撫でて方丈の奥なる自己が居室に入れば、はや傾く夕陽に庭の樹間を赤く染め出しぬ、腰の大小を床の間に立掛け、衣服を脱ぎ替へて澁茶一碗、心氣こゝに澄ませば猶更ら大地に根を持つが如き男、ふしぎや世間の人竝と同じ皮肉の五體ながら、二の腕を劈かれし荒療治の疵痕に兎の毛の疼痛も覺えず熱氣もさゝず、本國を立退いて前途の身も定まらぬ江戸の空、今この浪々の手薄き假住居に我を覘ふ不俱戴天の敵ありとも思はぬ寛體自若、小僧が運ぶ山の芋の汁飯に夕餐の腹を肥して、その夜の枕に就けば夢も結ばぬ鼾聲、がう／＼と遠音に響く雷の如し、

## 其二十三

上野の曉の鐘、近く枕頭に響いて目を覺せば、夢にも知らざりし夜半の春雨に軒の玉水、さては飛石傳ひの奥深き庭の木葉に宿る露雫、きら／＼と今朝の旭日に輝いて我が居室へ照り返す心地さよ、長右衛門おもはず縁端に立出でて、まだ顔も洗はぬ襦衣姿のまゝながら、平生より嗜める小謠の一節そつと漏らしぬ、折しも當院の住職、老の眉を蹙めながら、入り來りての私語聲、

「高倉殿、貴方、神尾備前守殿に兼ての御入魂あらるゝか」

「いや、さらに存ぞぬ事、じたい、如何やうな御人で」

「見るに初見ながら名は聞き及ぶ前の町奉行、只今、立關へ來られて、當院止宿の浪人衆に逢ひたいとの仰せ」

「む、神尾備前守、町奉行を勤められし御人とか、それが此、この高倉長衛に、や、兎も角も書院の一室を借用いたしたい、はて思ひも寄らぬ異なる客來ぢや」

きのふの事ありし今日の我に對して、前の町奉行といへば現在の職に居らずとも何とやら外ならぬ筈の人、もしや其事かと思ひながら、さて屋敷へも呼び迎へず家來をも差向けず、わざと其身が尋ね來りて浪人の假住居に逢はんとは、顔を洗ひ口を漱ぎ鬢の毛を搔き上げ衣服を改めつゝ、たゞ脇差を帯びながら靜に我が居室を立出でて廊下傳ひの書院口、わざと小僧に案内を乞はしめし後、襖を開いて入り入るや否、ふと見上ぐれば昨日の見物中より我がために聲かけられし老人、加之も不意の介抱うけし其人、

「やれ、こりや昨日の御方、さては歴々の御身分であらせられましたか、存ぜぬ事ながら、あの砌は兄の仇に覘はれし不祥の折柄、殊更に差控へて何事も伺はず其儘の段」  
 「は、元は兎も角も當時は閑散無用の身で、いはゞ隱居仕事に市中ぶらく保養歩行の途上、あの體を見物いたして思はず近來の胸を開いた心地、あまりの出來し

鹽梅に惚れてまるツた、卒爾ながら貴方、いづれの浪人衆であらるゝ」

「は、元來の不所存もの、相傳の主に見放されて奥州路より近ごろ流れ渡りましたる浪々の境涯、憚りながら姓名の儀は高倉長右衛門」

「いかな仔細あるかは知らず、天晴それほどの男が主に見放されたとは思議ぢや、面上の太刀疵だけでも槍一筋に取替への武家裝飾となるべきを、まして行き届いた昨日の働き振といひ、見事の武士一人を惜しけもなく可惜ら捨物にせられた主人こそ、さてく不所存な方ぞよ、は、奥州路と聞いた上、その言葉は何とやら會津らしい音聲、もし加藤家の人であられぬか」

「方言は故國の手形、そこまでの仰せに今更の祕し立は詮ない事、いかにも會津の加藤家に親譲りの奉公いたせしものながら、ちと運わるく生來の首骨が硬うて當世二代目の君前風流に叶はぬ奴ぢやとの御意、それがため勘當せられ、この額際より鼻



には猶更の御高恩、第一あの又八郎がためには生命救助の氏神様、歴々の御面前と憚り多き大口ながら仇も仇、この長衛を兄の仇に持った彼奴、よくくの武運に盡きた男、いかにも惘然に存じましたる折柄」

「そこぢや、現在、名乗もかけず不意に木戸口より打ち込んでさへ、きのふの勝負あれほどの相違、いづれ竟には知れし事ながら、彼も武士の一念、もし聞かずば何とせらるゝぞ」

「致方もない事、何時いかなる場所にもせよ、その志節に免じて二度までは助け遣はし、三度目には一刀の血煙、せめて苦の無いやう」

「や、それでこそ大剛の仕業、さらに一點の瑕瑾もない美事の本意、さて其上の貴方いかに世の中を渡らるゝぞ、もし他に奉公仕官の希望あらば及ばずながら肝煎いたさう、もし生涯このまゝの浪々ならば我等また分相應の寸志を運ばう、こりや當座

の好奇心ではない、かゝり合した人情でもない、神以て當世希有の男振に惚れ込んだぞ、はゝゝゝ」

「さて不思議、やれ奇怪、かくまで浮世の調子に外れて出来た奴、どこが御意に召したやら」

「その當世に外れた出来工合、その調子を踏みぬいた出来鹽梅、猶更ら嬉しう思ひ込んで、はゝゝゝ年齢は幾歳にならるゝ、まだ妻子を持たれずか、但し本國に残し置かれたか」

「何心なく問はれし一言いかに人知れぬ胸を刺しけん、かくまで不敵の男ながら、はつと思はず苦しけの顔色、俄に聲を沈めて差俯きぬ、

「ことし三十の曉、妻は御坐らぬ、まして子は持ちませぬ」



## 其二十五

たゞ一僕を召連れたるばかりの手輕き隠居老爺ながら、流石に昔を偲ぶ白髮の武士氣質、そのまゝ見捨て兼ねての業とのみ思ひしに、前の町奉行を勤めし神尾備前守とは案外の人品、加之も其身わざく我が浪々の假住居を訪ね来て、かずくの芳志、あくまで打解けて優しき情の言葉を受けし高倉長右衛門、翌朝あらためて答禮のため神田小川町の屋敷を訪ひぬ、

わざと立關の取次に名札を差出して、そのまゝ足早に立去りしが、門を出でて半町あまりの背後より走せ來る家來に引戻され、また奥へ呼び込まれて、きのふに勝る待遇振、果は手を盡せし料理に半日の盃を強ひられつゝ、其日の正午を過ぎし頃、やうやう遁ぐるが如く席を辭しぬ、

誰に憚り何者に恐れねど、白晝この面の太刀疵を繁華雑沓の市中に見返らるゝも蒼蠅しと、會津より着馴れし編笠は例の時に打ち捨てたるまゝ、あらたに求めし目關笠に面を包んで、小川町を立出でつゝ上野への順路に筋違橋を渡りしが、さて家に我を待つものなし今の身に急ぐ用なし訪うて語るべき友朋輩はなし、加之も久しぶりの盃に思はず過せし酔顔ほろりとして笠越に吹き入る春風の心地、淺草川の河岸傳ひに山谷あたりの景色こそと、ゆらりく町中を右に折れて歩みぬ、

淺草に塵深き觀音の境内を避けて、小うたに唄ふ駒形堂の裏道より、聖天の森影に川越の眺望、いつしか夕陽に彩る雲間の筑波山、絶えず眼下の葦の葉蔭を縫ふ白帆の往來、ほつと薄墨の刷毛繪に似たる關屋の里、さては夕煙の空に消え行く綾瀬の遠近、おもはず時をうつして見返れば、はや樹間より市中の燈火ちらく、

いざとて我みづから我を促しつゝ、聖天の森を降りて山谷の追分まで來りし頃、黄昏

の辻に濁聲あけて喚く奴あり、

長右衛門、何心なく立寄りて見れば、あはれ旅姿の小女一人、まだ十七八の世に馴れぬ初々しき袖を捉へて、毛脛の荒男二人が左右より俄の難題を挿みし體、傍に乗り捨てし空駕あるは正しく此奴等、この花の露を吸はんがための曲物と見るや否、ぬつと無言のまゝ立入りて猶更ら驚く眞白の手を引出しぬ、

「やれ妹か、何として来た、年端も行かぬ女の一人旅とは儲あまりの無用心、なれど運よく兄に逢うたは汝の僥倖、こゝは山谷の追分ぢや、我が家へは二三町、それ急げ、急げ」

不意に呆れし二人の曲者、また何をか喚かんとする面上を、そつと軽く片手の逆撫にせしまゝ見返りもせず立去りて歩みながらの小聲、

「いづれの女ぢや、どこへ行く、さす方まで送り遣はすぞ」

ほつと始めて我身に返りし風情、手を引かれつゝ刻み歩の小腰を打屈めぬ、

「はるぐの旅路をまゐりました女、あの駕には、千住の先の草加と申す土地より、

せめて日のあるうちにと、つい油断いたしましたしての事、たづねまする人は、このお

江戸の浅草に、廣小路の横町とやら」

「む、千住街道より此のお江戸へ、言葉といひ、ふしぎに同じ奥州路の生産ぢやな、

浅草廣小路の横町、そこに知邊あつてか」

「近頃、浪宅を構へましたとの風聞、西川、又八郎と申しまするもの」

長右衛門、おもはず足を停めしが、また歩み出して幾度か笠越に首肯きぬ、

「幸ひの歸途ぢや、その門口まで送り遣はさう」

はるく、奥州路より道芝の露を踏み分けし旅の空、この江戸に人を尋ねて迷ひ來し女といへば、さめし曉の我が身にも俣ばる、夢心地、何とやら餘所ならぬ一入の哀れに手を曳きながら、偕その男を西川又八郎と聞いては、いかに流石の高倉長右衛門も思はず足を停めぬ、

されど心の底より憎からぬ敵、我を兄の仇と覘ひながらも、日夜の白刃を磨いで要害堅固に身を守るほどの敵ならねば、いと猶更ら憎からぬ敵、まして我より進んで打ち込むべき心底さらに無き折柄、たゞ不思議の縁の怪しき絲目、どこまで搦みゆくかと人知れず胸に手を置きぬ、

はや暮れ果てし宵闇の途上ながら、市中の窓漏る火影に我が面上の太刀疵、いづれ西川が由縁の女として噂に聞き及ばぬ筈なし、たとひ聞かず知らずとも一目ちらと忘れぬ此の疵面に途中の難を救はれて門口まで送られたりといはゞ、さらぬも又八郎が重

ね重ねの腸を断つべき無念さ心外さ、さぞや猶更ら骨身に深からんと、そのまゝ編笠も脱がで何氣なく手を引きつゝ歩みぬ、

「我等も元は奥州もの、見ず知らずの他人とは思はぬぞ、まして年若い女の一人身にはるくこの江戸へは定めて仔細のある事、よくくの一念、その西川某とやらお身のためには何となる人ぢや」

笠越の目に軒端の火影をうけながら、じろりと見れば、はつと俄に差俯いて恥づかしけの風情、さては又八郎が色白の優形男、こりや忍ぶ戀路に迷ひ出でし情の露ぞと思へば長右衛門、すつと言葉を外して無心に打笑ひぬ、

「あれくあれ見よ、あの火事場に等しい大火影は音に名高い江戸名物、こゝ隨一の浅草觀世音ぢや、廣小路よりは目と鼻の間、はゝゝゝ、朝夕の參詣も心のまゝぢや、や、これが廣小路、それ、その横町といへば一筋二筋、まづ三筋目まで、いちく



西川又八郎、いかに血氣の念力を奮うて心は猛く氣は荒立てど、諸流いちく凡そ一年づつの間に其道の師匠を凌ぎしといふ天性こゝに不思議の武道者、わけて大剛の膽魂に五體の急所どこにありとも知れぬほどの高倉長右衛門が、初代明珍の鍛えし南蠻鐵の柄頭もて電光石火の間一髪に打ち割つたる額口、見れば眼前さのみ目に立つ事もなくて、心身ともに疲れ果てしがため只その場に一時氣絶せしのみと思ひの外、浪宅に立歸りし其夜より總身に大熱を發して、前額の頭骨に火柱を刺し込まるゝが如き苦痛、おのれ心外と眼を怒らしつゝ躍り上れば、ふらくとして目鼻も眩むほどの惱亂、おもはず兩の拳を握り枕紙に喰ひ付いて男泣きの悲鳴をあけぬ、

「わざく、會津の空より日本晴の此の江戸で、黒山の如き白晝の見物中へ氣絶しに來たか、せめて一刀兩斷の屍とならば武士として武運に盡き果てしまでの事、かゝる恥辱も苦痛もあるまいもの、なまなか生き残つて人目に立たぬ此額の打疵に間斷な

き日夜を悩まさるゝとは、さてく又八郎が前世いかなる恐ろしい罪を作つたやら、加之も五年十年の艱難辛苦に草の根を搔き分けてさへ居所の知れざる仇討あるに、この淺草と、あの上野、いつ何時たりとも呼び出さば罷り出るとぞ吐した一言、耳の底を扶られて腸を揉らるゝ、あはれ一日は儲置いて半日、それもならずは二刻か一刻、もとの身體となつて最後の一太刀打ち込みたい、無念心外、高倉長右衛門ツ

五臟六腑を絞るが如き聲に、上野の方角を睨んで臥しながら煩悶する體、本國より附き従ひし下郎の身として如何なるべき、慰めん言葉もなく取静めん力もなく、たゞ頼むは神佛、眼前に醫藥の業、その枕頭に身を抛け伏して主従もろとも忍び泣きの悲惨さ、わけて夜に入れば大熱いよく全身を苦しめて、燈火の光輝いづこにありとも目に見えぬほどの又八郎、

「水、水、水ぢや」

## 其二十八

たゞ一刀の柄頭に額口を打たれしばかりの事、見れば小判一枚ほどの紫色に腫れ上りて梨地に等しき血汐を染め出したるのみなれど、袋の中の瀬戸物を碎かれしが如く、あはれや皮肉の底深く前額の頭骨に割龜裂の入りたる西川又八郎、さらに醫藥の甲斐も神佛の效驗もあるべき筈なく、日夜ます／＼總身に大熱を發して煩悶苦惱に堪へざる體、實は無念の執着心に引かれて息の根の通ふのみ、

いつしか淺草寺に響く初夜の鐘の音も過ぎて、次第に更け渡る世間いづこも同じ夢にや入りけん、たゞ幽に犬の遠吠えを聞くのみ、壁にうつれる燈火の影ほつと薄闇く、枕頭に煎藥の匂ひ何とやら浪々の假住居に一入の悲哀を添へつゝ、やう／＼熱の引潮に勞れ果て、我にもあらず睡りし眼ふと見開けば、夜着の裾邊より靜に我が脊を撫で

しもの、平生介抱の下郎と思ひの外、さし俯いて泣音を忍ぶ女の風情、

又八郎、割るゝばかりに苦しけの枕を歛てつゝ、眉うち顰めながら燈火の小影に見直すや否、はつと其のまゝ痛める額を叩くが如く伏せて、きれ／＼に絞り出す聲、

「夢、夢にしてほしいぞ、田鶴どの、いつ此所へ、何として此の、この又八郎を、この江戸の空まで、わざ／＼苦しめに來られた、さも無うてさへ、今日この頃は一期の恥辱を身に浴びた武士の丸潰れ、夜も日も絶え間ない無念心外、四苦八苦の折柄ぢやツ」  
 はや今は夜着の裾邊に忍び音の身を枕頭に抛け出しながら、きくも辛し見れば猶更ら悲しさ遣る瀬なさ、おもはず這ひ寄りて男の肩口に取縋りつゝ、わつと泣き伏しぬ、  
 「お氣の濟むまで叱られます、又はる／＼と、たゞ一人、來ましたもの、これほどの重い御病氣とは、せめて、御介抱だけ」  
 「介抱、入らぬぞ介抱、無用ぢや、兄の仇を眼前に差置いて、自己が頭も得あけぬ此見苦

しい醜態、おめくくと疊の上の死際に女、加之も、まだ晴れての夫婦でもない女に、戀人に、介抱せられて又八郎、猶更の事、やれ苦しや何と人にいはるゝ、そこ退いた」

「退かぬ、退きませぬ、この田鶴こゝ退いて、どこへ、何處へ」

「や、聞分のない、そこ退いて行くところは故國ぢや、たゞ一人で来たといへば、いづれ無分別の旅、親御に對しても又八郎、わけて平生の友朋輩が手前、わざく江戸の空に向うて覗うた仇も得討たず、病み惚けた枕頭へ自己が戀人を呼び寄せた奴といはるゝ身ぢや、田鶴どの、もし療治が行届いて本望を達した曉は、なれど、今こゝ暫時は、拜む、たのむ、無情の男と怨まれるだけで済ましたい」

いつしか互に手を取合うて涙の雨、燈火も届かぬ臺所の片隅に黒闇より漏れ来る下郎の泣聲、

## 其二十九

神尾備前守より内々に呼び迎へられて、高倉長右衛門、小川町の屋敷へ行けば、奥まりたる一室にて西川又八郎が事、

兎も角も今朝、まづ家來を遣はして兼ての和睦一條を説き諭さんとせしに、あの額際の打疵より案外の大病重態、とても一命覺束なしと見定めて其のまゝ立歸りし上は、もはや力に及ばず是非もない事、あはれ彼が武運に盡きたる最後、せめて息あるうちに貴方の一工夫、冥途の兄が許へ土産に持ち行くべき分別なきかと問はれて、流石の長右衛門こればかりは生涯の難題、おもはず大息を漏らしぬ、

さりとして神尾備前守に問ひ返せば、また同じ當惑の體、眼前これぞといふ工夫も分別もなく、つまりは運命の二字を涙一滴に見送るより外なし、

さてく志節のみ天晴れ世の人並に立勝りながら、いぢらしや我を敵としては力も業も餘りに拙劣き男ぞと、そのまゝ小川町の屋敷を立出でて、はや上野の山内、常照院の我が宿に近づきし折しも、一寺の門内より脚下へ散り來りし一枚の反故紙、見るとはなしに何心なく見れば、墨くろくくの筆太に菩薩心夜叉手の六文字、長右衛門おもはず立停りて、菩薩心夜叉手、菩薩の心に夜叉の手と幾度か口のうちの獨言、大刀の柄に兩の袖を上せて其のまゝ、靜に歩み出しぬ、常照院の假住居、縁端の柱に脊を凭せて庭に對へば、いつしか春も更けて樹々の若葉に残んの花、ちらほらと名残惜しけに梢より入相の鐘に連れて脆く散り行く哀れさ、何とやら氣も心も打沈みぬ、思へば仇も仇に依りけり、そもく我ほどの男を兄の仇に持ちしは彼が不運の不運、とても死すべき生命、あのまゝ、半日を保たば半日の無念を重ねて徒らに惱亂するのみ、い

づれ叶はぬ運命、あのまゝ、一日を過せば一日の怨恨を重ねて詮なき業に煩悶するのみ、よしや萬一に無事息災の身となつて再び三度この我を覘へばとて、手を束ねしまゝ、我一命を與へずば彼がために不覺を取るべき我でなし、苦しや西川又八郎に對しての高倉長右衛門、あはれや高倉長右衛門に對しての西川又八郎、どの道よりも竟には必ず我が一刀の下に終るべき筈の彼が最後、空しく病の床に苦しめて日夜間斷なき血の涙を絞らせんよりは、こゝぞ情の外なる武士道の情、折も折柄なる菩薩心夜叉手の文字は我がため彼がための善智識、親の首を介錯してさへ孝に叶ふは武夫の常なりと、眉を寄せ腕を組んで閉ぢたる兩眼、くわツと見開きし瞳の光輝もの凄く床の間の大刀に注ぎぬ、をりしも本堂の方より幽に送り來る念佛讀經、はや夕暮の庭に茂りし樹陰の隅々ほつと闇し、



## 其三十

頑然として動かざる時は大地に根を持つが如き男、忽然として飛び出す時は風に木葉の散るが如き男、しかも面上の疵痕ありくと黄昏の目目にさへ立てど、その他の一切萬事は腸九廻するほどの事も顔色に出でざる天性、たゞ情に迫りて心に堪へざる時は大目玉の睫毛に宿る一雫、

小僧が運ぶ夕飯に腹を満たして後、住職の老僧と茶を啜りながら何気なき物語、おのが居間に立歸りて燈火を片隅に遠退けつゝ、夜着うち被いで其まゝ枕に就きしが、流石に今宵は雷を欺く例の鼾聲なし、

さらぬも市井の巷を天然の森蔭に隔てし上野山内の寺院、ふけゆく夜半に陰氣寂寞として奥深き一室のうち、宵よりの夢も結ばで枕を欬てし高食長右衛門、物凄き顔面

の眼を光らしつゝ、のそりと起き上りぬ。

わざと襦衣姿のまゝ、帯のみ堅く締め直して、床の間に立掛けし大刀を取りしが、俄に思案の體、やがて脇差ばかりの一腰、燈火うち消して縁端の雨戸一枚そろりと引開けつゝ、音なく庭に飛び降りながら、また元の如く閉しぬ、

古手拭に面を包み、裾を高く巻き上げての忍び足、庭口の樹間傳ひに本堂の背面を廻り庫裡の此方なる垣根を乗り越えつゝ、味噌醬油の通ひ路より門前に立出で、おもはず空を見上ぐれば幸ひの雨氣を含んで闇に残りし星影たゞ二つ三つ、ほつと薄く照る力もなし、

上野山内より淺草廣小路の横町まで、辻々の木戸口は前後に二箇所、もし怪しまるゝとも寢惚面の夜番奴を五人六人、そつと怪我なきやうに抛け出すは手のうち自在の男ながら、情の外なる武士道の情に人知れぬ今宵の涙を忍んで、さても哀れに憎からぬ

生命を取るべき白刃の苦しき、

せめては病魔の一睡うとくせし夢うつゝの眞最中、同じうは下郎も日夜の介抱に勞れ果て、身を横へし折柄、わけて本國より此の江戸の空へ馴れぬ女の一人旅、はるばる來りし甲斐もなき涙の雨の袖袂、いかに男の枕屏風となりけん、その仇敵の我とも知らずで手を引かれながら送られし哀れさよ、願はくは目も泣き腫して見えざれ、心も取り亂して覚えざれ、こゝに高倉長右衛門が一世一代の早業、電光石火も及ばぬ太刀影に現世の苦痛を助けたし、  
おもひの外に事なく、二箇所の木戸を打ち通りて、はや淺草廣小路の横町、かねて知りし西川又八郎が不運を包める浪宅の軒下、そつと立寄る折しも、何事ぞ俄に女の泣き叫ぶ聲、もろともに下郎が狼狽へ騒ぐ物音、いよく門口の戸に添うて耳を欽つれば、この曉も得待たで今ぞ生涯の最期、二十四年の息の引取際、

長右衛門、そのまゝ退いて人なき闇の大地に蹲りながら専念の兩手を合しぬ、彌陀佛、南無阿彌陀佛、

其三十一

俄に君命なりとて會津城中に大書院に伺候せるもの五十三人、いづれも馬一匹以上の家に生れし諸士の次男三男、十八歳より二十五歳までの間、等しく麻上下の頭を伏して居並びぬ、

上段の正面には藤典既の加藤家に二代の當主明成、例の大兵に猛氣の迸りし顔面、見るさへ怖ろしき眦の裂けたる體、今日ばかりは不思議に平生の酒氣もなく、やゝ反身に首をあけて元來の大聲、殿中の隅々まで耳を劈いて響き渡りぬ、  
「いづれも揃うたか、但し今日、俄に召寄せたは外ではない、前年出奔いたせし高倉

長衛が事、彼奴近來、江戸上野寛永寺の寺中に罷り在る由、その討手の人選ぢや」  
 きくや否、はつと一回いづれも御受の體ながら、實は身に取つての珍事出来、いよいよ生命の御用となりけり、この人中より君命の討手に選ばるゝは家の面目さてまた武士の冥加に叶へど、方角は暗劍殺、人には蟲の好かぬ敵あり、相手も相手あの物凄  
 い奴に向うて無益の犬死、こればかりは偏に御免を蒙りたしと、なるべく身を縮めて御見出に預らざる用心堅固の頭上へ再び響き渡る大聲、

「相傳の主には暇を乞はず、おのれが身勝手の一存に出奔の折柄、友朋輩の義理立に引止めた西川三左衛門まで討つて立退いたほどの奴、その三衛が舍第の又八郎また彼奴がために頭骨を碎かれて憤死したとの事、きのふ下郎が馳せ歸つて重役どもへ泣訴いたしたぞ、加之も世を憚つて姿を隠し身を忍ぶ奴ならば兎も角、正しく上野の寺院に居所分明の曲物、あの太刀疵の不敵面を江戸市中に曝し歩いて、これぞ加

藤家の千石に取替へた縁切の記念と吐さうも知れぬ奴、もはや堪忍ならぬぞ、わけて來春は江戸參觀の折柄ぢや、公儀への面目、諸家への手前、世間の取沙汰、うろく無事に生かし置いては當家の瑕瑾、それまでの間に踏み込んで討取れ、鹽首にして持ち歸れ、わざと家々の主人どもを召寄せぬは今日の彼奴、はや既に浪人相手の事、また汝等には部屋住の若輩取立のため、長衛が置去の千石其ま、當坐の賞に懸けるぞ」  
 今この太平の世に浪人の首一個を千石の御褒美は有難けれど、さて其首一個が我等の生首二三十を並べても聊か覺束ない奴、忠義も利慾も時と場合の相手に依りけり、いざ此上は満座の運定め、誰彼と名を呼び出さるゝが冥途の旅立ちやと、おもはず顔色を失うて額越に見上ぐれば、南無三寶、君の目球そろく動いて唇端いよく開き始めぬ、  
 「但し長衛めは元來の膽にも腕にも一癖ある奴、場數のない若輩者が二人三人では逆も叶ふまいぞ、幸ひ今日の座に罷り出た五十餘人のうち、五人づつを一組として以

上五組の討手ぢや、次席へ退ッて鬪取の上、いちく、姓名を書き立てい」  
 戦國でもなき今この太平の世の中に武運の冥加至極、また部屋住の我々どもへ斯る功名手柄を仰せ付けらるゝ段、ありがたく御禮を申し上げ奉るとの言上、いかにも打ち揃うて天晴れ頼み甲斐ある面々なれど、さて君前を退りし後の別席、いよく死覺悟の鬪取となれば平生に似合はぬ俄の慇懃を極めて君子に等しき謙遜禮讓、まづまづとの挨拶に終局なし、

## 其三十二

御前を退りて別席に集りし五十三人、あまりに時刻がうつるぞ如何いたしたとの君命を傳へられて、もはや絶對絶命、おのゝ運を天に任し目を塞ぎながら、火の玉を掴むが如くに手を差出しぬ、

總體の人数に合せし觀世捻五十三本の中より先づ一番手の五人を抜き取り、あとの四十八本より二番手の五人を引去り、また四十三本より三番手の五人、三十八本より四番手の五人、残る三十三本より後殿の五番手に當りし五人の鬪を引いて、ずらりと其の儘左右に席を分ちぬ、片側には運わるく黒星の當り鬪を取つて、苦蟲を噛み潰したる如き不興の面相二十五人、片側には目出たく白星の無事息災を得て、ほつと思はず生命拾ひの溜息を漏らせし満面喜悅の二十八人、その中央に重役一人、進み出でて左右の姓名いちく書誌しながら奥へ入りぬ、  
 あとは暫時そのまゝの無言に泣き面と笑顔の睨み合、されど流石に何處やら武士の種かくなりし今は死鬪を取りし奴も千石の褒美に心を勵まし、また討手に漏れし奴も聊か羨ましげに言葉をかけて、雙方より一時の挨拶を施しぬ、  
 「さて、方々は部屋住の身、親兄に立勝つた這般の冥加至極、こりや正しく弓矢神

の御守護でがな、一死の御用は多年の恩澤に養はるゝ武士の習慣、君命とあらば火水の中へも飛び込むべきが奉公の勤務、まして敵手の高倉長右衛門、いかに天性不敵の武道者として、もはや羽翼が勞れて時を失うた旅鴉一匹、こゝに二十五人の面々が五組となつて晝夜間斷なく覘うたらば、そのまゝ無事に生捕るも、半殺しに組み伏せて引き摺り歸るも、また斬り刻んで膾にするも自由自在、はゝゝ、但し彼奴が置去にした千石の御褒美は初太刀の一番手柄に下さるゝとの事、こゝが面々の働きた次第、そのうちの誰殿が得らるゝやら、蔭ながら我々、新知頂戴の御披露お祝盃を待ちまするぞ」

「や、うちあけた心體、實は先刻、不意に始めて君命を承つたとき、なみくの奴と違つて敵手が敵手、聊か當惑いたしたが、さていよくかうと定まつた以上は、我等また不肖ながら先祖傳來の武家腹に育つた侍冥利、あれほどの奴を物の美事

に討取つてこそと、はゝゝ、高倉長衛とて摩利支天の再來でなし天狗でなし化物でなし、たゞの人間、ちと世間普通より骨節の硬い奴、さりとて人斬庖刃の立たぬ道理は無い筈ぢや、千石の御褒美を戴いて御披露の祝ひ酒まるらす前、まづ彼奴が生首の鹽漬で澁茶一杯を進ぜたい」  
「やれ勇ましいぞ、生首の鹽漬で澁茶一杯これ何よりの珍味馳走、その猛勢で覘はるる高倉め、もはや運命の油が盡きて燈火の消え際、はゝゝゝ」  
「彼奴は今年三十、二十五人で總身の一年づつを喰ひ取れば、やう／＼三歳兒の三年越、はゝゝゝゝ」

其三十三

高倉長右衛門を討手の人数、二十五人こゝに五組の鬪取ありしと聞くや否、千石の御

褒美を戴かずとも新たに馳せ加はつて第一番の初太刀を打ち込みたく、もし叶はずば眞先の屍を曝して残る面々の血祭にならんと、重役の手許まで願ひ出でしものあり、川上傳太郎、當年二十一歳、

川上傳太郎は川上主馬の舍弟、兄は前年重陽の式日に遅参せしのみか闕に躓いて襖を御前に倒せしがため、其場の手討となりしもの、高倉長衛が出奔せしも事の起因は此日これがため、いはゞ兄の一死に涙を注ぎし其者の討手に其の弟として今日わざ／＼願ひ出でしは不思議の至極ぞと、呼び寄せて心體を問へば、不調法にて御手討となりし兄は兄、君を見限つて立退きし高倉は高倉、其間さらに何の仔細も恩仇もなし、ただ彼奴に向ふほどの武士冥利に外れたる段、身に取つて面目なし人に對して心外なりとぞ言ひ張りぬ、

城主明成、かくと聞いて思はず小膝を打ちながら、うい奴、面白い奴、二十五人の外

の一本立として身勝手の働きを差許すぞ、もし美事に爲て退けた曉は、兄の手討以來そのまゝに捨て置きし閉門謹慎を解いて、あらたに重く召出すとの君命、この川上傳太郎に引續いて、またもや一人こゝに飛び出せしものあり、田島勘作、當年二十六歳、内々そつと重役の許へ馳け込んでの願意、實は西川三左衛門が舍弟の又八郎こそ我が妹の戀男、その又八郎が兄の仇を覗うて江戸へ出立の後、女心の一筋に迷ひながら追ひ行きし甲斐もなく、頭骨を打ち割られて憤死せし男のため、あはれ十八の尼となりつゝ、又八郎の下の郎もろとも泣く／＼立歸りし眼前の因縁、申さば妹婿の仇なり其また婿の兄の仇なり、馬一匹の家に生れし部屋住の身分ならずとも、以上の次第この念願を聞き届けられたし、高倉長右衛門、いかほど武道に秀でたる大剛かは知らず、二十五人の方々に夢さらぬ働き致すべしとぞ願ひ込みぬ、城主明成、また思はず満面の微笑を浮べながら、その田島勘作が心體あはれに勇まし

いぞ、彼は僅に百石取の納戸役、もし長衛が腕なり脚なり斬り込んで不具になさば三倍増の三百石、生命を丸取にせば其一倍の六百石、此奴も川上傳太郎と同じく別に二十五人の外の仕手として勝手次第の働きを差許さんとの君命、

川上傳太郎まづ第一番に會津を立出で、田島勘作ひきつゝいて一日おくれの第二番手に立出で、三日目には五十三人中より鬪取に選ばれたる二十五人、おのゝ五組に分れて忍び出でぬ、

かくとは夢にも知るまじき江戸の空、上野山内の常照院に浪々の身を横たへて、高倉長右衛門たゞ一人、

其三十四

上野の森の塙を出でし鴉の聲、やうく東雲の空に飛び去りて、まだ樹下闇の奥深き石燈籠に前夜の燈火ちらほらと残る頃、常照院の門の開くを待ち兼ねて、朝ほらけの小僧に會釋しながら旅姿のまゝ、高倉長右衛門を訪ひ來しは、二十五人の外の本立に會津を最先駈の川上傳太郎、

親疎もろとも一切こゝに本國の音信を断ちながら、訪はるれば逢はで叶はぬ同郷の情誼、暫し次の一室に待たせて後、寢床を離れし朝の身仕度を整へつゝ立出でぬ、

「やれ川上殿の御舍弟か、いよく男振になられたぞ、その後は心ならぬ無沙汰に打ち過ぎて、但し見らるゝ通りの境涯、浮世に縁のない抹香の風下で浪々の侘住居ぢや、はゝゝ、御免なりませ」

「いづれに御坐らうとも、御壯健が何よりの大慶、わけて先年、兄の主馬、御前不調法にて御手討の節、貴方様たゞ御一人、満座の中より御言葉を添へられました段、

さぞや本人は勿論の事、残る親どもを始め弟の身として傳太郎、いかばかりか、  
第一それがため」

「いや、そりや一切いはぬ事、また聞くも辛し、今更何となるぞ、は、は、は、さる儀は  
措いて今日、この江戸へは君の御用でか、身の御修業でか」

「やうく二十歳を越えましたばかりの若輩もの、部屋住、わけて兄が事以來、閉  
門謹慎そのまゝの身、おのれが修業のためさへ叶はぬ筈のところ、ふしぎに俄の御  
内用、加之も分際不相應の大役を蒙りまして」

「さしたる罪もない兄御が御手討となりしのみか、今日まで一族其まゝの閉門とは、さ  
てく非道の御沙汰、あまりの御無體ぢや、なれど現在こゝに御後悔あらせられて、  
いかにも憫然な事して退けたとの思召でがな、されば猶更忠勤の勵み時、わけて御奉  
公大切に努めらるゝが身のため、かりにも不所存ものゝ長衛づれを見習うてはなり

ませぬぞ、また今後この浪宅への御訪ね無用、君に對して御遠慮なさるべき筈ぢや」  
川上傳太郎、慇懃に頭を下けし後、あらためて膝を進めながら聲を潜めぬ、

「御教訓、いちく有難く心得まする、但し此度この身が承りましたる分際不相應  
の大役、實は、貴方様の一身上に就いての事」

長右衛門おもはず眉を擡めて、じろりと其顔を打守りしが、さらに目色も動かぬ平生  
の悠々寛々の

「む、この、この長衛が一身とは」

「定めてお笑ひ草ながら、河上傳太郎め、討手に向ひました」

「や、それは何よりの御手柄、なれど儲お一人ではあるまい、政道の慈悲沙汰には御  
不得手の君ながら、武道の心得には元來の勝れたる御方、この長衛を討取るには討  
取るだけの御工夫ある筈、まして猶更の事、川上主馬が弟たゞ一人を向けらるゝ



筈なし、は、は、は、

「いかにも御言葉、馬一匹の資格以上に生れた二男三男より鬪取の二十五人を五人づつの五組に仕立て、これが正しく當の討手、この傳太郎は、わざと追ひ願ひの一本立に一番駈けの出立いたせしもの、また田島勘作とて別に同じ一本立の勝手働きを許されたもの一人、こりや西川又八郎に自己が妹より因縁を繋いだとやら、さて總勢は遅くも兩三日中に江戸へ到着の筈、御用意専一、但し此儀は川上傳太郎が申し上げる次第でなく、御手討に果てましたる兄の主馬より内々、そつと、お耳へ入れ置けとの、夢の靈告にて」

## 其三十五

相傳の君に見放されて墳墓の地を叩き出されし不所存ものと笑ふ人あらば、それもよし、

し、相傳の君を見限つて本國を逐電せし不忠不義と譏る人あらば、それもよし、善惡ともに會津の空は一切こゝに見も返らぬ心體、三十の曉を始めて浮世に生れ出でたる我となりつゝ、たとひ尾羽うち枯らして草を敷寝の淺ましき身の果に落ち込むとも、あはれ此のまゝ生涯の浪々を覺悟に渡らんとする高倉長右衛門、されば舊來の知邊も友朋輩も親疎もろとも忘れ果て、いざや今後これより新なる世の中に交れば交るべき知邊も友朋輩も自然にあるべしと思ひし折柄、まづ第一の交親となりしは身に取つて幸ひ案外の長者老功、前の町奉行を勤めし名物老爺の神尾備前守、わけて西川又八郎と斬り結びし時、相手は未熟の若輩といひ兄の仇討といひ色白の優形といひ、黒山の如く人垣を築きし見物の人情、いづれも関の聲をあけて彼が聲援となりし其中より只一人、さらぬも面上の太刀疵に物凄き色黒の大男、わけて萬人の憎氣を受くべき仇持の我この長衛に聲をかけて、あまり出來し過ぎるぞ不覺を取る

な武士の勝負に容赦するなどは、正しく我がための知己なり、加之も其後に引續いての芳志、隔心なく打ち解けての待遇振、求めねど唯一人の友もなき今の身には猶更に入の情しみくくと感じぬ、

長右衛門、今日も招かれて小川町の屋敷に晝過よりの物語いつしか夜に入りつゝ、盃の數も重ねしかば、そのまゝ辭して歸らんとせし折柄、備前守、仔細あり氣に容を更めながら膝を進めぬ、

「長衛殿、ふしぎの縁で互に斯く親しう打ち解けた間柄となるばかりか、お身のためには何とやら、片心の煩累となりし西川又八郎も惘然ながら病死の今日、もはや氣に觸る事もない筈、さて今後いかにせらるゝ、兼て申す通り他に奉仕官の希望あらば随分、加藤家の舊知以上、見苦しからぬやう膽煎も致さう、また其まゝの浪々で渡らるゝにせよ、天晴それほどに出來た男を、抹香臭い寺の片隅に捨て置くは諺

にいふ明玉の草叢、あまりに寶物の投棄、何としても勿體ない惜しい事ぢや、もし町方に稽古所を構へて流れ込の弟子取るが面倒なれば、當時歴々の諸侯方へ選抜武道の師範に出入されても、生涯、みごとに一身は立つべき筈、ついては異なる事を急ぐやうなれど、三十の曉に獨身とは、はゝゝ世間體、ちと物足らぬ心地ぢや幸ひ此、老爺、是非、うけて貰ひたい物がある、實は子息はお身と同年、不肖ながら上の御鑑定に叶うて昨年の春以來、泉州の堺奉行に罷り越し、當家には嫁と幼少の孫娘二人の外、縁類の厄介一人これが二十三の女で、親同胞も死に絶えた跡の預かりもの、兎も角も一應これへ呼び出す、それとなく餘所ながら、一目、ちらと見知り置かれたい」

南無三寶、義理の柵、なさけの柵、今その身を覗ふ二十七人の討手ある事さへ、一言も發せざるほどの男ながら、はッと思はず目鼻を皺めぬ、

## 其三十六

もし持つべき妻ならば、たとひ氏素性なき足輕の娘にもせよ、わけて浪々の今の身に猶更ら小夜が事、本國を立退きしは去歳の九月、その前の月より人知れぬ我が情の胤を宿せしといへば、ことしの今こゝに四月の末、はや來月は産月、あはれ男子なるべきか、さても女子なるべきか、いぢらしや涙の母が胎内より父の顔さへ得知らず其のまゝ生れ落ちて、かはいや浮世の行末いかなる里に生ひ育つやら、それさへ心強く振り捨て、この江戸の空に假住居の境涯、露霽、顔色には出さねど、をりくの寢覺勝に枕を欬てながら軒の雨にも窓の風にも何とやら、過ぎし情を殘んの燈火に偲ぶ身の今日この頃、いかでか他なる娶り沙汰、されど現在の芳志、かくともいへぬ義理の柵に、おもはず眉を顰め眼を閉ぢし高倉長

右衛門、今は二十五人の討手と二人の敵に規はるゝ我が身の運命、うち開けて語るの外なしと膝を進めぬ、

「いかな御縁でやら、どこに一點の見どころもない筈の、この長衛めに斯くまでの懇篤なる思召、わけて舊の身とは違ひ、近來の境涯、すぐにも仰せに取継りたいは山山ながら西川又八郎たゞ一人の時でさへ、あれほどの御心添を下されし長右衛門、實は只今、この首一個を千石の交換として總勢二十七人の敵に晝夜間斷なく規はれまする折柄」

「や、何といはるゝ、總勢二十七人の敵に附け規はるゝとは」  
 「いかに御懇意を蒙るとも、いや、御懇意を蒙れば蒙るほど猶更ら以ての事、たゞ親兄のため一家一身の討討に來るものとは違ひ、いづれ御迷惑を及ぼすべき筈の大敵、こればかりは長右衛門、生死の定まるまで一言半句、御耳に入れまじとの覺悟いた

せしところ、なれど御前の思召に従はざる申譯の證據として」

「その證據、その委細、聞かう、是非に承りたいぞ」

「實は會津の君命として、この高倉長衛を忍びの討手、鬪取に選ばれた二十五人を五人づつの五組、別に仔細ある二人の仕手を加へて以上、總勢二十七人」

「さて、當時の會津殿は先代と黑白の相違、大名にも似合はざる執念の深さ見苦しき、ついでには貴方、何と覺悟せられた、いかに工夫せられた」

「これとて別段の工夫も、さしての覺悟も、たゞ潔く引受けて勝負いたすまでの事、かりそめにも奥州會津四十萬石の主人として、今は浪々の身となりし舊臣たゞ一人の首を覘ふに藩中鬪取の血氣二十五人に二人の仕手まで差添へらるゝとは前代未聞の業、高倉長右衛門、身に取つて武士の冥加に叶ひましたる次第、まして二十五人の面々白刃を揃へて一時に襲ひ來ればとて、この長衛が生首、元來團子細工で無し、

は、は、は、は、

其三十七

上野東叡山寛永寺は將軍家の深き因縁所、その寺中の常照院に身を置けば自然の要害堅固、敵の踏み込む筈なく、白刃の閃く恐れなく、身を守るには此上もなき金城鐵壁ながら、高倉長右衛門、顔色を失うて殺傷禁制の下に鬪を作りしといはれては生涯の無念、一期の心外、我から好んで敵を招くにあらねど、彼より進んで覘はれし上は是非も無し、もはや一步も退かぬ武士道の意氣地、たとひ舊恩の君命たりとも、よしや互に顔を知り合ふ故國の馴染なりとも、この生命おめくと渡すべきか、二十五人と二人を相手に我一人の勝負は面白し、萬一もし討たれて生首の鹽漬を會津に送らるゝとも世間の外聞、死後の取沙汰、さのみ恥辱になるまじ、いざや來れ、いつなりとも

來よかし、時も處も嫌はぬぞとの勢ひ猛虎の群羊を待つが如し、  
俄に上野の常照院を去りて黒門前の横道に浪宅を構へ、下郎も置かず下女も召使はず、  
自己たゞ一人の大の字形、夜具一組に枕一個、自炊の土鍋飯に居ながら呼び込む味噌  
醬油、朝は戸障子を明け放し、夜は行燈の火を掻き立てつゝ、今まで編笠に面を包み  
て往來の人目を忍び歩きし身が、わざくこのごろは面上の太刀疵ありノと繁華雜  
沓の中央に曝し歩く大膽不敵、門口の木札に墨くろくくと筆太に高倉長右衛門の六文  
字、宵圍の鳥目にも鮮明なり、

「や、こゝぢや、長衛殿、居らるゝか」

曾ては重き役目を勤めし身ながら、元來の氣も心も手輕き上に今は猶更ら隠居分の神  
尾備前、例の一僕を召連れたるまゝ、門口より聲かけて入りぬ、

「小川町様、よくこそ、まづくと申したところが御覽の手狭き二室、あれが厨、こ

れが厨、そこが客室、こゝが居室、はゝゝゝ大手の總廓が一間半、搦手の雁木口が  
九尺、主も家來も只これ一人の働きで」

「はゝゝゝ兎も角も城廓出來、何より目度たい、せめて走り使の雜兵一人を置かず  
ばなるまい」

「いや、大將一人の兵糧さへ覺束ない籠城に、家來の口があつては敵への返り忠も同  
然、はゝゝゝ内より火の手で落城いたしますぞ」

「定めて嘸、其邊の儀もあらうと存じて、お氣に觸へられまいぞ、こりや當分の寸志、  
聊か兵糧を運び込んだ」

懐中より紫 緞紗に包みしまゝの小判幾枚、づしりと重けに差出せば、長右衛門、靜  
に押戴きぬ、

「こればかりは力に及ばぬ重寶の品、わけて外ならぬ方の賜物、長衛、ありがたく受

納いたしまする」

「それに限らず、もし他に入用の事あらば、何時たりとも、但し其後、會津臭い風は吹き込まずか」

「たしかに此の、江戸へ入り込んだと聞き及んで半月あまり、なれど、規はるゝ一人より附け規ふ二十五人の用心こそ、却つて堅固の體、はゝゝゝまだ影も」

「はて、不思議ぢや、その二十五人の敵よりも身の油断が大敵」

さて其後は互に膝を進めて、聲を潜めながら俄の私語、やがて高く大口あいて、からからと笑ひぬ、

其三十八

「や、この門口の木札に高倉長右衛門、もし前年、故國を出られた長衛殿ではあるま

いか」

「世の中には同名異人の往々ある事、故國の高倉長衛殿いかに浪々されても千石浪人、

こりや餘りの佗住居ぢや」

「生憎く我等、さのみ親しう交はらいで、これが長衛殿の手跡と確實の判断ちと覺束

ない」

「兎も角も尋ねて見るが第一、もし其人ならば此まゝの不知顔、濟まぬぞ」

「いかにも同郷の情誼、組合役柄は違つても顔は互の知合、わけて浪人せられた今を

尋ねてこそ人情ぢや」

わづかに半窓の格子一重も隔て、内と外との小借屋、をりしも長右衛門、夢は結ばね

ど肱を枕に晝寢の耳元、はツと思はず鎌首を立てながら、さては狼狽へた野狐ども二三

匹そろく隠れ穴を這ひ出して、この虎の尾坪を嗅ぎに來せたぞ、まだ餌食とするに

は早けれど、幸ひの徒然に引き摺り込んで、まづ鼻柱だけ曲折ツてくれんとの心體、寢ながら内より破鐘の如き大聲を振り立てぬ、

「同名異人でない、正しく會津の空を見限ツて出た高倉長右衛門ぢや、いかにも言はるる通り千石浪人に似合はぬ佗住居ながら、澁茶一杯の用意はある、ずツと其のまゝ這入られい、一年ぶりに本國の噂も聞きたし、また主持の得知らぬ氣樂さも教へて進ぜたい」

どこやらに針を含んで刺すが如き言葉に呼び込まれ、さらぬも自己等が心の底に一物を抱きし三人、おもはず門口に二の足を踏みながら、やうく入り来るを見れば、果して藩中に歴々の親兄を持ちし血氣の徒輩、わざと今更ら肩腕を張りぬ、

長右衛門、のそりと起きて、廣くもあらぬ一室の柱に脊を持たせつゝ、物凄き太刀疵の面魂、ぎろりと光りし眼に見渡して悠々たる大胡坐の體、

「おのれが我がまゝの不所存で身勝手に本國を立退いた奴、青痰でも吐ツかけて笑ひながら通らるゝかと思ひの外、流石は氏ある家の面々ぢや、ようこそ優しう尋ねて下されたぞ、長衛、今は見らるゝ體の尾羽うち枯らした佗住居ながら、儲まだ幸ひに飢も渴えもせず、五體ますゝ無事に猶更ら入らぬ腕節の達者加減、ちと面白い敵でもあらばと存するほどの折柄、はゝゝゝゝ、一番この長衛を相手に取ツて生首を捻ぢ切るといふやうな生命不知、御坐るまいかな、もし萬一あらば十人二十人、一まとめに差向けて欲しいものぢや、今日の高倉、奉公の主は無し、傳來の家は無し、まして恩愛の妻子は無し、年こゝに三十の曉、身すがらの一本男、夜なく膽魂が鳴り出して寢られぬ程の苦しさ、療治に當惑いたす、はゝゝゝゝ」

片手を伸ばして大土瓶の口より自己の口へのうつし飲み、またもや鋭き眼光、ぎろりと三人の面に注ぎぬ、

「浪人の境涯、萬事かう無作法で無うては時の便利が届かぬ、なれど面々は今後どれ程の出世せらるゝやら知れぬ身に、行儀を崩されてはならぬぞ、じたい往來を歩くにも三人連は法に叶はぬ、五人づつが兼ての約束ぢやツ」

きくや否、三人おもはず顔色を失うて、逃げ出す事も打ち忘れながら、あツと驚きし呆れ顔、

## 其三十九

まづ斥候として浪宅の體を窺はんがため、二十五人中より選ばれし辯口達者の血氣三人、もし引き出すべき寸隙あらば口車に乗せて謀策の深水へ引き摺り出し、もし討込むべき油断あらば其のまゝ其場に討ち込んで拔断の功名手柄と思ひの外、のツそりと臥したる猛牛の角に籤蚊三匹ほどの顔色もなき高倉長右衛門、加之も口を開けば嚙

んで吐き出す如き傍若無人の不敵さに、たゞ呆れて驚いて目と目を見合はすのみ、五體は居縮んだるまゝ舌の根は吊り上りて言葉なし、

長右衛門、靜に大胡坐の身を起して、何をするかと見れば、この白晝に門口の戸、がたりと閉ぢぬ、

「故郷といへば牛馬の喰ひ餘した枯草の葉も懐かしい諺、まして本國同藩の事、さのみ平生は親しうもない部屋住の面々ながら、今この長衛が身に取ッては他國十年の知己よりも床しいぞ、せめて半時なりとも引き止めたい、ならば今夜このまゝ枕を並べて夜と共に語りた、佗住居の浪々なれど幸ひ炊置の飯はある、厨に魚鳥の肉は無けれど棚元に梅干と焼鹽、これが即ち山海珍味といふもの、まづ氣の濟むまで主人振の馳走に歸さぬ心體ぢや、はゝゝゝゝ」

斜めに太刀疵を帯びたる額越の兩眼、ぎろりと光らして物凄く冷かに聲を霞めながら



打ち笑へば、さらぬも入口の戸を閉め切られて今更ら遁場を失ひし三人、いよく身を縮めつゝ針の筵に坐せるが如し、

「や、これは高倉殿、思召は千萬なれど、儲、我々は、たゞ往來の途上、ふと御意を得ましたのみの事、いづれ其うち改めて、ゆるく」

「いかにも、改めて参上いたしたい、たとひ御不如意は無くとも只今、かく御浪々あらせらるゝ上は本國無事の我々、お見舞の品も持参すべき筈を、空手のまゝ伺うたほどの次第」

「實は三人同道、ちと差伸べのなり難い急用の折柄で」

長右衛門、おもはず天井を打仰いで、ますく高く笑ひながら、床柱に立掛けたる鐵粧飾の一刀、そつと引き寄せて膝に横へつゝ、右の拳を鐔際の絲柄に上せし面魂、眞正面より三人の眼を射返しぬ、

「おもしろ呵しう打解けて終夜、あくまで隔意なく語らうと存じたに、急用の途中とあらば強ひて引止めも致さぬ、なれど折角この長衛を訪はれた芳志に對して、講學のため面々へ聊か武道の心得を傳授いたさう、其膝そのまゝ押並べて、すいと進まれい」

進めといはれて無遠慮に進まるべき敵手か、加之も背後の徒手さへ何とやら怖ろしい奴が、一刀そろりと眞正面の膝に上せて右の指端に捻ねくり廻す體、おもはず顔色を失うて三人もろとも座を居退れば、長右衛門、猶更ら身を乗り出して、わざと聲低う私語くが如き眼球の光輝、いよく薄氣味わるし、

「いかに日夜、骨身を碎いて武道の稽古に勵まるゝとも、生命に別條のない木刀の勝負とは違ひ、そもく生涯一度の大事に出逢うて瞬間に死生を争ふ太刀打は案外平生の鍛練も修行も儲、さのみの用に立たぬものぢや、つまりは膽魂たゞ一個の業、

その膽魂の働きさへ確固ならば、たとひ白刃の襖に取圍まるゝとも、まづ武運の盡きざるかぎり、やはか敵に爲てやらるゝ恐れはない筈、またこの膽魂といふもの、智者學者さては禪家悟道の類に何といふかは知らねど、動かす騒がす音もなく靜肅なる時は、自然に不思議の通力あつて敵の出沒進退を見抜く事、まことや我ながら明鏡の如しぢや、はゝゝ、現在お身達が今日、この長衛を訪はれたも、浮世の義理でなし同朋の好意でなし、往來の途上に門口の名札を見て立寄られた人情でなし、實は兼てより承知しながら態と今更めて此の浪宅の深淺を瀬踏みに來た面相、運よくば長衛が鬢の毛一筋も撚り取つて手柄顔センとの目色ありくゝと見ゆるぞ、ついでには幸ひ武道の傳授、こゝぢや木刀の外に勝負を知らぬ御身達へ大丈夫が備へた膽魂の働き鹽梅、觸らば血の出る眞劍の切味を今、教へて進ぜるぞ、はゝゝゝゝ、また大口あいて高く打ち笑ひながら、片膝の居合腰に一刀の鯉口、するりと三四寸、

覺えの拳に鏢際を抜き出しつゝ音太き聲を含んで、勝負、勝負と睨まれたる三人の面色土の如し、

## 其四十

わづか六疊と四疊半の二室より無き手狭の浪宅、その四疊半の壁際に三人の相手を押並べて入口の戸を閉め切りつゝ、もはや身動きもならぬ箱詰の眞正面より居合腰の一刀に勝負々々と迫りし高倉長右衛門の猛勢、やツと叫ぶ聲もろとも血煙を立つるかと思ひの外、また俄の大聲に天井を打仰いで、からくゝと高く笑ひぬ、

「嘘ぢや、こりや嘘ぢや、はゝゝゝこの長衛、向うて來る奴は何者も許さぬが、顔色を變へて遁場を失うた魂魄脱殻の相手に迫る男でない、まして眼前、お身達三人を撫斬するに門口の戸締りも居合腰も入るものか、よく思つても見られい、こゝまで



に添うて歩く間が娯樂ぢや、は、は、は、なれど草深い片田舎とは違うて日本一の大都會、この人臭い江戸繁昌の雑沓に見失うては相濟まぬ、さりとて三人の帶際に手をかけても歩まれまい、や、それくこゝが兼て覺えの放し斬、じたい武道十八番のうち放し斬といふものを知らるゝか、こりや敵が三四人に我たゞ一人の時、その三四人、ぱつと俄に前彼左右へ遁け出す間一髪の早業、いはゞ電光の如く身を躍らして餘さず一時に薙き仆すべき極意精妙ぢや、は、は、は、」

走れば忽ち喰ひ附かるゝといふ山中の送り狼に尻こぶたを舐めらるゝ心地、三人おもはず居縮んで歩を停むれば、長右衛門、大刀の柄頭に脊骨の邊を一突き、

「や、御免なれ、怪我ぢや、怪我ぢや、うかと致した」

## 其四十一

私怨でなし遺恨でなし、また事の是非曲直は儲置き、君命を受けて我を打たんとする者ども、男らしき仕手として來らば我れまた男らしき相手ともなるべきに、小ざかしや三人の奴原、まだ乳の香の失せざる素丁稚根性の分際もて此高倉長右衛門が息の根の通ひ路を試みんとするのみか、機よくば追從輕薄の口車に乗せて油斷の不覺を覘はんとは自己等が身のほど知らぬ大白痴、あまりに我を見損うたり、

さらば幸ひの徒然、兒戲に等しけれど當座の慰み半分には弄んでくれんととの心體、もとより方角の違ひしところへ誘ひ行くとは承知の上、をりく後より大刀の柄頭に脊骨を突きながら、田舎伯樂の瘦馬を運ぶが如く半日そのまゝ追ひ歩いて、神田本郷、はや日も西に入り果てし小石川白山下の黄昏ごろ、例の大聲からくと俄に高く笑ひ出しぬ、

「四里四方の江戸市中、どこまで行くか續くか脛腰の根くらべに追ひ歩かうとした

が、さてはや思へば罪な事、こゝで許すぞ、生命拾得の禮を述べて立歸れ、但し一味同類に傳言せよ、この高倉長右衛門が生首一個、もし道に叶うての御用とあらば、今この主従の縁は無くとも舊恩の君前に心地よく謹んで差出すべき男なれど、無體の御所望には會津城の天守臺と交換へられても不承知の男ぢや、まして豆の數取に等しい二十三十の奴原が飛べばとて跳ぬればとて、はゝゝゝゝ」

以上いちく忘れず傳へよとの言葉を殘せしまゝ、さらに一目も見返らず、悠々として立去りぬ、

夕暮の白山下より本郷追分の森川宿、やがてまた湯島天神の片邊より上野の森に宵闇の星影を見透しながら、家に待つもの無し身に用は無し、ぶらりくくと不忍の池傳ひに黒門横町の浪宅へ立歸りし頃は、いつしか人の往來も絶えて秋の夜の露に草履の音まで濕り勝ちなり、奉公仕官の勤めもなき浪々の氣樂さ、妻子眷族の煩ひもなき獨身

の手輕さ、盜まるゝ財寶なければ用心の鍵も無い門口の戸を引き開けて、身代もろとも捻ぢ込みし腰巾着より燧石と火奴を取出しながら、かちくと破行燈に火をうつして、炊置の土鍋飯に冷めたる澁茶と焼鹽の夕餐を濟ませし後は、枕頭に這ひ寄る猫の子一疋の友もなき狐影寂寞、さて無言のまゝ寢るより外に用なし、

かくまで心の雲もなき野原の月に似たる男ながら、人間の前後不覺、いざ寢る時となれば、まづ内より門口と裏口の戸を固く閉して、加之も行燈の火を掻き立てつゝ、いちち戸袋の奥、押入の隅々まで眼を定めて見廻る體、靜に夜具を取伸べ身を大の字形に、ふと何心なく見上ぐれば、廣くもあらぬ二室の此方より斜めに厨の上、ふしぎや閉め切りし筈の天窓に三四寸ばかりの隙間ありて、差覗くが如き闇夜の星影きらりと光りぬ、

長右衛門、わざと燈火を次の室の閤際に遠ざけながら、一刀を枕頭に引き寄せつゝ、

そのまゝ、睡たけの兩眼をうとくと次第に細く閉ぢしが、果して夢か、うつゝか、心の底まで寢入りしか、

## 其四十二

いかに江戸繁昌の市中とはいへ、上野の山蔭、不忍の池の端、森の樹間より水を渡りて枕に通ふ初夜の鐘の音、はや往來も絶え果て、踏み残せし草の葉に蟲の聲々、まだ初秋ながら夢路を誘ふ軒端の風そよよと寒く、空の星にや燦めく屋の棟の露いと深し、

まして獨身の浪宅に香しき餌もなければ鼠の漁り歩く音さへなく、かすかに油も盡きなんとする燈火の光輝、ほつとして薄闇く、壁にも映らぬ主人の寢顔、はや死人に等しかるべき眞夜半ごろ、厨の上なる天窓の曳戸、次第に開いて、まッ黒なる大男の兩

脚、ぬツと宙に吊り下りぬ、

その脚そのまゝ、蛇の如く梁に纏うて、天窓の曳綱に猿の如く五體を吊しながら、するすると降り來りしは面部を包みし曲者そツと片隅に身を縮めて暫し四邊を窺ひしが、また音なく這ひ出でて主人の寢顔を見極め自己が働きの足場を見定めし後、さらぬも消えかゝる行燈の火を猶更ら細くし、腰に帯びたる大脇差、きらりと抜き放ちつつ息を殺して覘ひ寄りぬ、

高倉長右衛門、どれほど心に油断なき大剛の男なりとて、夜は寢る筈、睡れば前後不覺の筈、その寢首を水もたまらぬ白刃に掻き取ること、枯草の根を引き抜くよりも易かるべし、よしや譬ひ生死の境に目を覺まして跳ね起きんとするも、はや既に物の蓋する如く乗りかゝつて狼狽へし寢枕面を刺し通すこと、さのみの腕も業も入るまじとや思ひけん、そろゝ夜着の裾邊に這ひ寄りし曲者、鎌首を立て、枕頭を差覗くや否、

「危いぞ」

はッと思はず飛び退けば、夢か、寢言か、すやくと其のまゝに睡る體、我ながら怯れたりと氣を取直し、再び這ひ寄れば、またもや夢か、うつゝか、臙氣ながら、  
「うかく、近寄るな、危い、危い、危い、生命が無いぞ」

流石の曲者も總身ぞツと骨まで刻まる、心地、もはや三度目に這ひ寄るほどの勇氣もなく、たゞ自己を忘れし呆れ顔に打守れば、長右衛門、ばたりと寢返りの音高く枕を仕直して、くすくすと笑ひぬ、

曲者、おもはず次第に這ひ退りながら、頭も得あけず差俯きぬ、

「高倉殿、高倉殿、田島勘作、あらためて御意を得ましたい」  
長右衛門なほ臥しながらの聲、

「む、田島勘作とは西川又八郎が戀女の兄とやら、また二十五人の外の一本立を願う」

て長衛の討手に向ひしとやら、兎も角も志節だけは殊勝ちや、起き直らば曲者として一刀の下に打ち果すぞ、幸ひ斯く寢惚けた間に無事に立去れ」

「や、そこまで御存じあらせらるゝ上は猶更の事、たとひ曲者として一刀の下に斬らるゝとも田島勘作、寢たまゝの高倉殿に助命は願はぬ」

「さてく敵手を辨へぬ不心得の人ぢや、この高倉長右衛門に一命を助けられて元來お身、どれほどの恥辱となる、いかほどの男が潰れる、されど達ての所望とあらば

起き直るぞ」

靜に枕を欬て、起き直らんとする間一髪、田島勘作、さツと飛び込んで一念無言の白刃を斬り下しぬ、

其四十三

田島勘作、規ひの寢首を搔き損ねて、もはや叶はぬ進退こゝに谷りしかと思ひの外、長右衛門が枕を擡けて起き直らんとする間一髪、飛鳥の如く躍り込んで打ち下したる念力の甲斐もなく、すつと外されて空を斬るや否、その利腕を取って三歳兒の如く捻ぢ伏せられし苦しき、齒を噛み鳴らして無念の聲を絞り出しぬ、

「やア長衛、勝負は濟んだぞ、生命は貫はぬ、斬れ 殺せ」

長右衛門、捻ぢ伏せたるまゝ身動きもさせず白刃を奪ひ取って、からりと片隅に抛け捨てながら、靜に手を放しつゝ、微笑を含んで打ち對ひぬ、

「いはざる事か、かうなるべきが理の當然ぢや、但し勝負は濟んだ斬れ、殺せとは見苦しう捻ぢ伏せられても聞き苦しうない言葉、また何處やらに武士は棄らぬぞ、あらためて白刃を磨ぎ直せ、いつなりとも出直して來い」

田島勘作、今は却つて何の恐るゝ顔色もなく、ぐつと膝を押詰めて血走る兩眼、

「この一命を取らるゝか、その生首を鹽漬にして本國へ持ち歸るか、二事に一事、生前の約束なけれど、西川三左衛門がためには死後の縁を繋いだ兄同志の我、又八郎がためには心を許した妹婿の仇、よし然なくとも第一の面目、君の御前へは鬪取の外より乞うて討手に向うた田島勘作、捻ぢ伏せられて白刃を奪ひ取られし今どこに棄らぬ武士が立つぞ、運命こゝに盡きたる上は、もはや君への申譯も濟んだ、西川兄弟への義理も濟んだ、残るところは叶はぬ敵の業に爲てやらるゝのみの事、いさ斬れ、高倉長衛この世の無事にあるかぎり、のめくゝ生面の遣場もない田島勘作ぢや」

「西川兄弟といひ、現在お身といひ、一度ならず二度三度、さてく憎氣のない敵に出逢ふぞよ、何たる因果ぢや、身に取つての迷惑千萬、まだ此の外に一人、や、猶更ら辛い敵手に規はるゝ筈」



「そのや川上主馬の弟、あの傳太郎でがな、鬪取に選ばれた二十五人の委細この田島が事まで、そつと内通した筈、するが人情、せずばなるまい筈の男とは兼ての承知、さればこそ今、我が名を名乗るや否、又八郎が戀女の兄かといはれた一言にも驚かぬ勘作、その傳太郎に對して猶更ら此のまゝに立たぬぞ」

「や、君命とあらば、亡兄への手向に一應の内通しながら、儲あらためて我首を規ふ傳太郎が手前、西川兄弟に縁を繋いだ身として猶更の意氣地、さる事なれば、よく思つて見られい、つまりは其の傳太郎にも討たれぬ筈の長衛、また二十五人の仕手にも討たれぬ覺悟の長衛、立たぬといへば現在お身一人が立たぬ男でないぞ、恐れながら會津四十萬石も、むら雲の荒模様、さうかくすれば世に立つか立たぬか覺束ないほどの折柄ぢや、もし今こゝに捨て、惜しからぬ生命あらば、その一命を持ち歸つて君前に諫死せい、實は二十五人も助けてやりたい心體、よしや萬に一事、

首尾よく此の生首の鹽漬を本國へ運び得て、元來、どれほどの忠義となる、どれほどの手柄になる、それを忠義と思召し手柄とせらるゝ君こそ、素浪人たゞ一人のため、に可憐ら大切の御身分を忘れて、加之も行末まだ御用の多き若輩の家來どもを無益の犬死に使ひ捨てらるゝ事、正しく亡國の兆ぢや」

「は」  
「素浪人と相傳の君と、いづれが重い、いづれが軽い、今こゝで高倉長右衛門のために殺されて本望か、たとひ聞き召されずとも君前の諫死するが本望か」

「は」  
「二十五人は儲置き、幸ひ同じ鬪取の外より討手を願うた川上傳太郎と談合の上、改めて來られい、この長衛がために死にたくば取るに足らぬ相手一人づつ面倒ぢや、二人もろとも押並べて一刀の下、もはや其の時こそは無言の早業、念佛も南無もい

はさぬぞし

## 其四十四

高倉長右衛門が浪宅の東隣は角の酒屋の庫に續いて人なき物置小屋、その西隣に住める葉茶屋と蠟燭屋の二軒もろとも、俄に所帶道具を取方附けて近處合壁へ一言の挨拶もなく、そのまゝ逃ぐるが如く何處にか引き移りし二日目の朝、また何處よりか俄に所帶道具を持ち込むものあり、加之も二軒の入口を一箇所にして、隔ての壁と壁とを打ち抜く廊下傳ひの普請、さては以前より聊か身代の太い奴が住み込むかと、かゝる事には無頓着の男ながら用なき徒然の垣間見、ふと門邊を差覗けば運ぶ荷物に町人不似合の品々、何とやら色香めいて蒔繪の化粧道具もあり、取急ぎの普請も濟みて道具一切を運び入れし翌日、六十あ

まりの古若黨を案内として折しも秋の小春日和に華奢を盡せし武家風の婢女四五人に取圍まれつゝ、わざと乗物を吊らせて染分の被着に人目を憚る大模様これぞ隣屋への主人か、包むに餘る香粉の盛装、小袖に漏る、伽羅の香氣、摺箔の裾邊に漣を打つ眞白の蓮歩、こゝかと振り仰ぎし花の風情に、ちらと見えしは二十歳ばかりの水際立ちし美人、名筆の浮世繪より脱け出でたるが如し、長右衛門、おもはず眉を擧めて人知れぬ舌鼓、やれ小面倒なる女が軒竝の隣屋へ來居つたぞ、鬼が住むも蛇が住むも勝手次第、さらに驚かぬ我ながら、その身を忘れて自然に姦しきは女の常、まして若き身空の白粉臭き女どもが、好奇心か出養生か、浮世知らずの珍らしき町住居に面白さの朝夕、べちやくちやと壁一重の枕頭に囁られて堪るものかは、第一こゝに日夜二十餘人の敵を持つ我、いつ何時いかなる事のあらうも知れざるに、萬一の怪我、かりそめの過失、おもはぬ氣の毒を見るのみか、もし不意

の騒動に泣き叫ばれては猶更ら以ての迷惑千萬ぞと、白刃の林に閉ぢ込められて動かぬ大剛の武者男も、わづか四五人の女童に隣家の空屋を陣取られて思案の小首を捻りながら腕を組み始めぬ、

翌朝、轉居の祝として、手を込めたる料理の膳部を運び込まれし時、長右衛門、慇懃に會釋しながら、そつと聲を潜めて下僕に向ひつゝ問ひぬ、

「こりや過分の御挨拶、ありがたく受納いたす、よろしく傳へて下されよ、但し異なる事を承るが、御主人は、いづ方の何と仰せらるゝ御身分ぞ」

下僕は何氣なく答へぬ、

「神田小川町より神尾家の息女分、ちと此頃は恙あらせられて、氣保養のため町方への出養生」

きくや否、長右衛門、おつと呆れて、無南三寶、いよく大敵ぢや、

## 其四十五

本國を立退いて浪々以來こゝに一人の知己、その神尾備前守に養はるゝ縁類の女ありて歴々の氏素性ながら、親兄弟も死に絶えし預かりもの二十三とやら、それを我妻にと勧められしは今年の春、

されど人知れぬ涙の袖に振り捨てし小夜が事を思へば、まして情の種を宿せしまゝの哀れを思へば猶更の折柄、幸ひ二十五人の敵に狙はるゝを身の楯として、やう／＼義理の柵を脱け出でてより半歳目、もし無事に産み落せば今頃は物こそ言はぬ愛らしき笑顔の子を持てる我、どれほど人情の柵に迫ればとて、あだなる餘所の色香いかでか心に見返るべき、

さるを其後の今この神尾家が息女分として、我この浪宅の壁一重を隔てし隣屋へ引移

りしは、武道の業こそ敵なくとも情の道には脆き男と見られしか、但しは朝夕の馴染を重ねて自然の人情に引き入れんとか、いづれにせよ日夜この生首を覘はるゝ高倉長右衛門の身と知りながら、いはゞ劍難の危き軒並びへ、若き身空の女ばかりを住はせし心體、もはや讀めたり、加之も久しき空屋でなく、わざ／＼内金を與へて二軒の住居を立退かせし體、まして浪々の寄る邊なき我、猶更ら日夜の敵を持つ我への芳志として、身に餘るほどの嬉しき恩義ながら、もし娶るべき妻帯の用あらば迎へて呼び取るべき妻も子もある筈の我なれど、今これを打ち明せば何とやら角立ちて入らざる事に軽々しく、また俄に飛び立つ如く他へ轉ずれば、神尾家に對して面當がましき振舞となるのみか、二十五人の奴原を恐れて動くと見らるゝも面白からずと、流石の長右衛門おもはぬ不意の油斷を浮世の牛擣となりし心地、まして重き役儀を勉めし身にも似合はず、心安けに手輕き老體に我を訪ひ來し其人が

其後さらに却つて一度の音信さへなきは、いよく仔細ありけの不思議、いかなる所存ありての事か、たとひ水の流れば急なりとも境は常に靜なり、よしや花の落つること頻りなりとも意は自から迫らずとやら、たゞこの上は白刃の敵にも情の敵にも身を動かす居を轉ぜず、なるべき自然に任せ來るべき運命に従ひつゝ、どこまでも我は我たる高倉長右衛門の外に工夫も思案も絲瓜もなしとの覺悟、例の土鍋飯に焼鹽と梅干の大茶漬を朝夕の浪人腹に詰め込んで、便々と喰ひし後は用なき身を倒して晝も夜も四邊かまはぬ大の字形の高躰、壁一重の隣屋に忽然として女護が島の湧き出でたるを知らざる顔色、野原の馬糞を枕とせる石佛の如し、されど淋しき秋の夜の更け渡りて燈火の影うす闇き頃、ひそ／＼と女の私語く聲に耳を小擦ぐらるゝ長右衛門、また夢さめて誰が訪ひ來る友もなき曉、庭口の籬根越に得

ならぬ伏籠の香を送られて、をりくく晝寢の枕頭へ琴の音の漏れ来る時は、この石佛  
いつしか思はず目鼻を動かさぬ、  
「こいつめ、何を小癩な」

## 其四十六

晝の土鍋飯を喰ひ過ぎたやら、用なき身の猶更ら腹膨れて、うとくと肱を枕の夢さ  
めし半窓より空を打ち仰げば、さらぬも短き秋の日脚いつしか西に傾いて、上野の森  
の梢を赤く染め出しぬ、  
をりしも門口を靜に叩く音、長右衛門、寢ながら振り返りて誰ぞと言へば、御免なり  
まとせの優しき女の聲、  
や、さては隣屋の曲者、そろく近寄ツたりと、心の舌鼓を打ち鳴らしつゝ、起き出

でて内より繋金を取外せば、果して四十あまりの召使婢、慇懃の小腰を屈めて何處や  
ら物馴れし會釋振、

「いづれから來られましたぞ、もし門違ひでは無いか、こゝは一切訪はるゝ女氣のな  
い浪人の獨身」

「これは近來、お隣屋へ引移りましたもの、召使はれ、女ばかりの町方住居とて、わ  
ざと差控へて今日まで、存じながら御意も伺ひませいで何とやら」

「いやく、それに及ばぬ事、五日以前御轉居の當日、はや既に過分の御挨拶を下さ  
れて、浪人もの久々の珍味に腹鼓を打ちましたぞ」

「そと伺ひますれば、御家來もないけの御獨身、さぞ朝夕の事と陰ながら、それには  
幸ひの手前方、水仕業に馴れました下女の手空ものが二三人、もの思召にさへ觸ら  
ねば、お手傳ひ申し上げて見よと、主人より言ひ聞けられましたて」

「は、は、は、御覽ぜよ、たゞ雨露を凌ぐばかりの浪宅、あの土鍋飯の炊置で其の日の埒あく男、さるを日々の厨に魚鳥の料理でもあるかのやう、わざ／＼お心にかけては却つて迷惑いたす、まして世間交際を得知らぬ無精もの、身勝手ながら今後一切、お馴染の儀は御容赦に預かりたい」

「は、は、は、其のお物堅いが猶更ら女ばかりの身に取りましたは朝夕お力に頼みたい事第一これが町人衆とは違ひ、お見受け申せば御身分柄の御浪人衆、また手前方も小身ながら武家生育の女、もし萬一ならうことなら、猶その上の御心易う、をり／＼は打ち解けて御夕飯も差上げたし四方山の御物語も承りたし」

長右衛門、今は無遠慮に顔を反けて、何を吐すか蒼蠅しとの面體、

「いや、御縁もない女儀ばかりの席上でお手料理を下されたり、また世間の人情談話を面白をかしう興を添へて囀るには浮世馴れた輕口達者な町人こそ御意に入る筈、

太平無事の今日、主取すべき武士として斯く素浪人になるほどの當世不向な奴、とても香粉の座は持て申さぬ、但し此の、この面を縫うた太刀疵が白痴威喝となつて自然お隣屋合、もし夜盜の御要害にもなれば重疊、せめての御挨拶がはりぢや御免なれ、夜晝なしの男、このまゝ寝まするぞ、はッはッはッはッはッ

吹き飛ばさんばかりの勢ひに大口あいての高笑ひ、四邊に響き渡りぬ、

## 其四十七

世馴れぬ家の奥深く養はれし女の身としては、素性も得知れぬ男所帯の壁一重、隣屋に何として住むべき、まして生面を斜めの太刀疵に縫はれし浪々の獨身者、この大男が何を身過の世渡る業もなく、ぶらりと無用の五體を横たへつゝ、刀を抱いて寝る外に一物の家財もない體、心弱き女氣は夢にも魔はるゝ筈を、わざ／＼打ち解けて頼

もしけに我を招くとは、さてこそ情に餘る例の大敵、やれ危し、引移りてより五日目、はや先鋒の四十女が入り來りて、つべこべと嘯りしを、吹き飛ばさんばかりの高笑ひに追ひ拂ひながら、ころりと其のまゝ横に肱枕の折柄、またもや門口を叩く音、や、懲りもせず二番の新手が押寄せたるかと、耳を潰して目を塞げば、

「高倉殿、お宿にか」

男の聲に長右衛門、おもはず頭を擡げぬ、

「誰、何人ぢや」

「卒爾ながら川上傳太郎、是非に御意を得ましたい」

「こりや珍客、今、あけまするぞ、童の指端に押ししても破れる筈の格子戸ながら、偕それが浮世の扉ぢや、は、は、は、」

身を起して内より引き開ければ、やうく今年まだ二十一の若輩ながら、ぬぎし編笠を片手に携へて時の流行も逐はぬ古風の衣服大小、どこやらに初心めかざる一分別ありけの面魂、加之も靜に落着いたる慇懃さ、禮儀を崩さず座に入りぬ、

「本國より此の江戸へ到着の曉方、あの常照院にて、そと御意を得ました以來、もはや斯く無事に御伺ひ申さぬ筈の傳太郎ながら、また御目にかゝらいでは叶はぬ次第あつて今日」

「あの砌は、御芳志、あつく受けましたぞ、僥倖、それがため今日までの息災の長衛」  
「いや、あれは亡兄よりの傳言で」

「いかにも、主馬殿の芳志ぢや、さてあらためて今日、我への御用とは」  
「過日、田島勘作が御助命を蒙りし節、一方ならぬ身のための御教訓に預かりましたとやら」





見違うた正しく大不忠の高倉、大不義の長右衛門、さてまた大臆病の腰拔男と始めて知った、もはや武士の風上にも置けぬ御人ぢや」

「む、面白い、他の奴原とは違うて聊か刃音のする鋒鉞ぢや、兎も角その仔細、きかう」

「今更申して詮ないことながら、君家破滅の兆を見捨て、立去るもの、忠臣で御坐るか、おのれの一身を安きに置いて舊恩の危きを餘所に見るもの、義者で御坐るか、武道に取つての業と敵に對しての膽魂、どれほどの達人かは知らず非道の君と知りながら、その非道を矯め直す分別も工夫もなく、なまなか生面の太刀疵を手柄顔に僥倖の身を遁れて土鍋飯に露命を保つもの、大臆病とは申さぬか、まして田島勘作への一言に、この長衛が首を覘ふよりも本國へ走せ歸つて君前の諫死せよと、今更仔細らしく他に勸むるもの、此奴そもく何の化物やら、は、は、は、は、さしての罪

もないに御無體の御手討を蒙りながら兄は兄、その弟として善惡ともに君命を奉ずる川上傳太郎、さらに合點まるらぬ、會得いたさぬ、腑に落ちぬぞ」

「いよく面白い鋒鉞、肉には通らぬが、長衛の薄皮一枚、たしかに削られた心地ぢや、但し忠義といふもの、お身は何と心得らるゝ、おのれが名聞の爲か、世間の譽物となるためか、また效驗のある無いに限らず唯その身を君前の屍として濟むべき事か、三度その君を諫めて用ひられずば去れとの本文、こりや強ち三諫の後に君臣の縁を斷つて自己を全うせよとの輕薄沙汰では無いぞよ、つまりは三度も諫めて何の甲斐なき君へは百度千度いかに諫めても争うても同じ事、加之も三諫以上に其の非を改められざるほどの君が常として、臣下の諫争に逢へば逢ふほど猶更ら猛氣の意地に募らるゝが古今いづれも一徹ぢや、わけて恐れながら加藤家二代の御當主を如何なる君と思はるゝ、親しく見聞せられた筈、過ぎし三年の間に血の涙もろとも

諫めて死んだ者が二十七人、諫書を差上げしまゝ人なき天主臺に絶食して餓死せしものが九人、とても詮なき業と見限つて他國へ退轉せしもの前後六十四人、その他無事に残つて今なほ奉公めでたく日夜の御意に叶ふ一列の人々へは仲間入の出来ぬ高倉長衛ぢや、また最初の諫死二十七人が犬死の手本さへ我に見せずば、必ず同じ君前の屍となりし筈の高倉長衛ぢや、かゝる折柄の一人、御刀の錆にもならず立退いたのが、元來どれほどの大不忠ぢや大不義ぢや、加之も唯そのまゝには立退かぬぞ現在お身が兄の主馬殿、あれは無慈悲の御手討となりし満座平伏の中に眞ッ直に首骨を立てしがため、身動きもならぬ疊一枚の上に押直り、あの怖ろしき大力早業の太刀風を外した男、もはや君の御目には現世に無い筈のもの、土鍋飯に露命を繋ぐ境涯に落つればとて、千石を捨てた其の後の長衛、他家他門に玄米一合の主取でもしたか、さるを今更、この生首の鹽漬が御入用との仰せ、あまりに下司の執念

めいて藤典既公の御長子とは勿體なし、正しく狐狸の類に御本性を引き抜かれし業、たとひ狂氣ばしせらるゝとも會津四十萬石の御主人にあるべき事か、まして二十五人の仕手を逆も叶はぬ我に差向けらるゝとは、二十五人の無用に死恥を曝せとの御意でがな、されど長衛の身に取つては生涯の罪つくり、いかにも入らざる殺生、唯この儀ばかりを走せ歸つて諫死せよと田島勘作に教へたのみぢや、いづれ我ために殺さるゝ生命を君の御前に捨てよとの事ぢや、何が怖さに臆病神の氏子となるべき、高倉長衛を見る目の見當が外れた、料簡まだ若い、ぷんと乳の香がするぞ、はゝゝはゝゝ

其四十九

年齢こそ僅に十年の相違なれど、高倉長右衛門が目より見れば、また何とやら乳の香

も失せざる川上傳太郎が黄色の嘴に、大不忠と罵られ大不義と嘲られ、大臆病の腰拔男、武士の風上にも置けぬ奴とまで言はれながら、さらに動ずる體なく怒れる顔色なく、いち／＼靜に事實の本末を説き聞かせし後、なほ膝を進めて聲を潜めつゝ、かくても捨て難き我が子弟を教へ諭すが如く語り出しぬ、

「よし今この長衛が不忠不義にせよ腰拔の大白痴にせよ、その白痴は我た一人の事いはゞ廣き河原に小石一粒の有るか無いかのやうなれど、恐ろしや會津四十萬石の大床が一時に搖ぎ出す程の大事、あはれ加藤家は二代で滅亡の前兆、あり／＼と見ゆるぞ、つまりは江戸將軍家の仕業ぢや、じたい先君は御幼少の頃より太閤殿下御取立の古兵、元來の御出身と申し自然の御老功と申し、わけて四海に英名の轟いた御方、をりしも東北の雲行いまだ定まらぬ奥羽二州を握り潰すほどの人なき折柄なればこそ、さるを今日その雲行も定まりて天下いよく太平、その先君も世を

去られし上は、もはや誰にても濟むべき筈の會津城、近き凡例は、同じ流れを汲んだ肥後の加藤家といひ安藝の福島家といひ、さのみの罪なくて二代目いづれも無慙に滅亡の當世、たとひ用心に用心を重ねて、萬の一事の御瑕瑾なうてさへ危き御身が何事ぞ、民百姓に不時の運上を召上げ譜代の家來を芥の如く斬り捨て、江戸の空も世間の取沙汰も憚らざる日夜の大酒亂行、こりや薪に油を注いで火を呼ぶの諺、さらぬも待ち受けた大穴の底へ身を躍らして飛び込む業、加之も其の穴掘は天下取の將軍家、悲しや君は今日、もはや會津四十萬石に用濟の跡を嗣がれし御身、のみならず徳川家直接の入魂大名として其のまゝの無事には差置かれぬほどの御非道、よくよく加藤家滅亡の時節到來か、とても人間業では分別も工夫も忠義の道も盡き果てた自然の運命ぢや、さしも世に唄はれた典厩公の嫡々、せめて三代の全盛を見る事か、こゝに二代の半も過ぎぬ曉、音もなく枯れ行く草の葉蔭に、あはれの露深き

蟲の音を聴くぞよ」

高倉長右衛門、おもはず眼中に男泣の涙を含めば、總身に水を浴びし心地の川上傳太郎、たゞ差俯いて無言の體、

「降るとも、照るとも、いづれ枯れ行く加藤家の運命ながら、もし今のうちに覺悟すべき道を求むれば、先代ほどの御用は逆も覺束なき不肖の二代目と謙遜謹慎の上、身に餘る會津四十萬石を返納いたし元の豫州松山二十萬石に仰せ付けられたしと理詰の情に將軍家へ願はるゝか、但しは君臣水魚のごとく内外の武備堅固に先君の功蹟を守りて江戸よりの一文句あり次第、奥羽二州を黒土として武家武門の面目この上もない花々しい天晴の最彼に主従もろとも城を枕にするか、この二途の外なき道さへ、當時あの御心體あの御行狀にては、それも叶はぬ事、及ばぬ事、さても是非なき事、無念ながら、天ぢや、心外ながら、命ぢや」

川上傳太郎、いよく差俯きし無言の頭上より、高倉長右衛門、また一入さらに聲を潜めぬ、

「以上の仔細、いちく具さに會得せられし上は、今この長衛が浪人首たゞ一個を取る取らぬの時であるまい、また既に去つて浪人となりし奴の忠と不忠を詮議の場合であるまい、田島勘作もろとも、お身も本國へ走せ歸つて、いづれ我がために殺さるゝ一命を君前に抛け出し、亡國破滅の先供せらるゝが、せめての事、あはれ自ら乞うて長衛の討手にさへ出られずば、このまゝ不義にも不忠にも落さず身を全うすべき工夫のありしものを、今更ら我と同じ道に連れ込んでは、進退ともに助からぬ生命惜しさの半途にうろたへて、遁けたりとの恥辱に逢ふ身、やれ可惜ら行末の逸物を犬死の板挟みに爲て退けたぞ」

川上傳太郎、心に會得せしか、せざるか、始終たゞ無言の果に目禮を残しながら、顔

振り上げて再び長右衛門の面も見ず差俯いたるまゝ、啞の如くに立去りぬ、

## 其五十

宵闇の星影より夜半の露に總身の濡鼠となるまで、屋の棟の瓦に吸ひ付く如く差覗きながら、天窓の曳綱を傳うて夢うつゝの枕頭を覗ひし甲斐も無く、捻ぢ伏せられ説き伏せられて立歸りし田島勘作、

その仔細を聞くや否、さては見違ふたり、案外の大化物、かくをも知らずで亡兄への義理に芳志を運びし口惜しさ、今更ら君に對して二十五人に對して申譯なし、せめては面の皮を引き剥いでくれんとこの勢ひに、一命を無き物として押寄せし甲斐もなく、また説き伏せられ言ひ破られて其のまゝ、無言に立歸りし川上傳太郎、  
兩人こゝに互の胸を打明しながら、そつと人知れぬ額を鳩めての物語、

「なう田島殿、いかにも高倉が心體といひ言葉といひ、いちく理に叶うた道理ながら、我等その道理に説き伏せられただけでは濟まぬぞ、また事の理解を會得しただけでは立たぬぞ、よしや亡國の兆あるにせよ、よしや御無體の君命にせよ、さしづめ敵手は今日のところ、會津を立退いた男ぢや、君の御意に叶はぬ男ぢや、その君に養はるゝ家來の身として會津より討手に向ふた以上、おめくゝ素浪人の舌の端に舐められては武士の丸潰れ、せめて一太刀、斬り込まいでば」

「や、いはれたぞ川上殿、そこぢや、我等また君を見放して會津を立退いた男ならば高倉の道理と理解を其のまゝ、身の守本尊ともするが、いまだ會津加藤家の恩祿を食む以上は奉公冥加の外、敵の口より出たる善惡邪正さらに入らぬぞ、一應この耳に聽いて當座の返す言葉ないのみ、身の進退と心の意氣地は格別」  
「さらば同心、いよく合體、この上を何とせらるゝ、縁に繋がる西川兄弟を打取ら

れた御邊とは違ひ、この傳太郎は君が御無體の御手討になりし主馬の弟、猶更ら以て一倍、わけての活動なうては立たぬ筈、もし御邊が高倉の理に伏して退かば、我たゞ一人の死物狂ひに馳せかゝらんと存じた」

「其邊の儀、一入お察し申すが、さて川上殿、いかに心は猛くとも、まづ太刀打は武道の業、其業を比べては心外ながら我等二人、とても彼には及ばぬ事、また業のみならば勝負に時の運といふ一理はあれど、彼は業の外に猶更ら恐ろしき不敵の根性を備へて、いはゞ磐石に等しい大敵、いづれ生命は無い物との覺悟なうては」

「こりや今更、知れたことをいはるゝぞよ、はゝゝゝ生命が惜しくば今のうち男を廢めて、寺へ遁け入るか他國へ出奔するか二途の道ぢや、はゝゝゝ」

「いや、生命が惜しいでない、死ぬが嫌さの言葉でない、右左より一時に斬り込で打ち取る敵ならば兎も角、まづ二人もろとも同じ白刃に爲てやらるゝ覺悟の敵には

ちと分別の足らぬ事かと思ふぞ、せめて一人、生き残つて本國へ馳せ歸り、彼がために説き伏せられたといふではないが、いかにも亡國破滅の前兆ある折柄、たとひ聞しめされずとも君前の諫死すべき時であるまいか、二人が異體同心ならば、高倉に向うて殺さるゝも、君の御手討になるも武士は立つ筈、男は廢らぬ筈、いづれ猫の餌になる魚ならば二尾は入らぬ事、その一尾は箸を取られずとも買はれた主人の膳部に入るが本望ぢや、いかに思はるゝ川上殿」

「さう聞けば天晴れ上分別、合點した、江戸で曝すも本國で曝すも、なるほど同じ屍ぢや、鬮取、鬮取」

「や、出來たぞ」

我が生首一個を千石の鹽漬に覗うて來りし二十五人も、つまりは無益の殺生、元は同じ土の根に咲き出でし友朋輩の子弟縁類、もし此身の生命にかゝらぬ片目か片耳か、手足の指端三四本の土産で濟むならば、人知れぬ内々そつと與へて彼等が面目も立たせたと思ふほどの折柄、

まして我がために無念の最期を遂げし西川兄弟への義理人情もろとも君命を脊負うて來りし田島勘作、君がために非業の手討となりし亡兄が怨恨の顔色もなく只この身への芳志を運びながら一命を捨て、來りし川上傳太郎、あはれ我が白刃の下に立寄りせたくなし、願はくは男も廢らず意氣地も潰れず弓矢神の冥加に叶うて無事息災なれと心に祈りて前後に説き伏せつゝ追ひ歸せしが、其後さらに何とせしやら、こゝ五六日は音もなく影もなし、

されど以上の敵は其の身も固より覺悟の生命にかけて來りし敵、もし許し難き我が鐔

際へ迫り來らば飛んで火に入る夏蟲の諺、たゞ一刀の下に斬り捨て、悲鳴も立てさせぬ我ながら、こゝに聊か小面倒なるは壁一重の隣屋へ香粉の陣を構へし大敵、いかな勇士も智者も古今この難物に爲てやられ、凡例は珍らしからず、うかくすれば落ちて浮べぬ深水の底に引き摺り込まるべし、まして先鋒の四十女が既に我が要害を見届けに來たほどの折柄と、流石の高倉長右衛門、こればかりは眉を顰めて辟易の體、加之も以來一切、さらに小川町の屋敷より一應の使者もなく一通の書狀もなく、また斯る時には猶更ら例の老體みづから例の氣輕さに訪ひ來ぬは不思議の至極、さりとして年甲斐もなき戲事に三十男の我を弄ぶべき筈なし、まして二十餘人の敵を持つ我身と知りながら、わざと足手纏ひとなるべきものを我に強ふる筈なし、弄ばずとも強ひずとも他の事とは違ひ遠くてさへ近き男女の常が、いふに及ばず軒並みの住居ぞと見らるゝには、二十歳に足らぬ大模様の色若衆が、うき世の華奢風流に身を委ぬる伊

達男への事、四季をりくくの衣服を着替へて市中に住めばこそ我、もし人なき麓に出逢は、山賊の巨魁とも見らるべき此の面、魂へ女沙汰のあらう筈なし、兎にも角にも生涯この分にては我運命、敵といふものに付き纏はれて悪縁の切目なかるべしと、語るに友なき獨身住居、おもはず高笑ひすれば、をりしも裏口の牆根越より我を呼ぶ聲、

「長衛殿、高倉殿」

はツと思へば神尾備前守、例の氣輕き調子に四邊かまはぬ大聲、

「實は今日、始めて此家へ來ましたぞ、今あらためて大手御門より使者を差立てる、是非に出馬せられたい、は、は、は、は、」

## 其五十二

此方より小川町へ行くか、小川町より此方へ來るか、壁一重隣屋の事いづれ此のまゝの不知顔に濟むべき筈なければ、いは、互の根くらべに、わざと一月あまり無沙汰の折柄、裏口の牆根越より不意に我名を呼びしは堪へ兼ねての聲、まづ今日までの睨み合に勝ちしが如きも、いよく奥の院の本尊が現れ出でたる心地、

たとひ隔ての壁を打ち抜いて招かるゝとも、小面倒なる女原に用なしとの高倉長右衛門ながら、浪々以來この江戸の空に只一人の芳志を運ばるゝ知己、神尾備前守といへば、行かで叶はぬ身、

程もあらせず門口より入り來りしは、曾て鼻息に吹き飛ばさんばかり追ひ拂ひし例の四十女、今日は手早き一應の口上を述べしまゝ、行く行かぬの返答も聞かで、來る筈との得意顔に歸りし面憎さ、

さりとして今更後れては却つて面白からず、はや暮かゝりし點燈ごろ、炊置の土鍋飯は



有餘れど、わざく夕膳の用意して待つとの口上に、軒竝びの隣屋へ獨身もの、腹を膨らして行くは猶更ら以て心を見らる、業ぞと、脇差ばかり腰に帯びつゝ、刀を手に提げしまゝ、おのれが入口を立出でて二三歩の入口へ案内を乞へば、また生憎、例の四十女め、取次に出でぬ、

「お隣家に住む高倉長右衛門と申す者、小川町の神尾様より當家への御招待に預かり罷り出ました」

「お取次いたさいでももの事、先刻よりの御待兼ね、どうぞ其のまゝ始めての御方なら兎も角、これで三度目お顔馴染の妾ほゝゝゝゝ」

さても女の口、入らざる音の出るものと、長右衛門、おもはず苦笑ひしながら其のまゝ奥の一室に打通れば、例の氣輕き老體、蓐を横に迂りつゝ、満面の微笑、

「これへく、その後は暫く逢ひ申さいで、戀ならねど積る談話が山々ぢや、はゝゝゝ」

はゝゝゝ

「いや、此方よりこそ、伺はいでは濟まぬ筈ながら、御存じの無性もの、たゞ其日を繭作る蟲のやう、業もなく引籠り居りました事、但し軒竝びの當家より御招待に預からうとは、さて案外、あまりの不意で長衛ちと夢心地、はゝゝゝゝ」

「や、どこまでも首骨の硬い剛者ぢや、まづ酒にして其の夢の覺めた頃、そろく語り出さうぞ」

はや女どもが心得て運び出す山海の珍味に長右衛門、何とやら伏勢の起りし心地、まづ無言のまゝ、大盃をさゝれて、おもはず鼻頭に太刀影の閃いたる心地、

### 其五十三

いかに織るが如き市中の繁華雑沓に立交るとも、たしかに目立ちて耳より以上の現る

べき大男、まして色淺黒き骨太の自然に備はる武者形、わけて平生の氣風と物に動せぬ元來の大膽さ、のツしりと座に落ち着いて盃を手にするれば、乾ける砂地の水を吸ひ込むが如く五升六升の酒、ぺろり底を叩いて空嘯くかと思ひの外、ふしぎや僅一二合に苦しけの高倉長右衛門、こればかりは案外の弱卒なり、それとは知りながら、わざと今夜は盛り潰す氣の神尾老人、頻りに大盃を強ひて膝を押詰めぬ、

「は、は、は、下戸も下戸に依る事、半病人に等しい骨細の小男ならば兎も角、それほど美事に出來た大丈夫の器が、嗜まぬとて豆のやうなる盃に、は、は、は、まして壁一重の隣屋ぢや、女どもの手舁にしても運ばるゝぞ、また此のまゝ此家で酔を醒まされても介抱に事の缺かせぬ筈、迷惑は何かの年貢納めと諦められい、まづ今夜は生捕ぢや、は、は、は、」

照り渡る燈火の光輝に見れば、長右衛門、満面に朱を注ぐが如く、斜めの太刀疵のみいよく鮮明に際立ちて、幽なる微笑を漏らす體、もの凄き顔面ながら、何となく名筆の武者繪めいて、とても浮世の市井には得られぬ男振

「こりや堪らぬ、降参、心外ながら軍門に兜を脱いで降参、この上の一滴は毒藥を強ひらるゝも同じ事、只管御宥免を願ひたい、もはや平生の高倉長衛、かやうに潰れましたぞ」

「は、は、は、ちと卑怯な振舞なれど、お身のやうに根強い剛の者には此處ぢや、一文句まるるぞ、じたい今日まで、軒並びの此家を何と思はれた」

「いや格別、何の氣にも止めませいで、只いづれの女中衆か、めづらし氣の町住居と見ました分の事」

「それ罰杯、女ども手首に取り付いて溢るゝばかり酌せい、轉居の當日そツと下僕に

小川町の神尾が娘分と聞きながら、知らぬ顔の無挨拶人ぢや、なみくくと酌け、容赦なく盛り込め、弱きものには手向はれぬ筈の御人ぢや、は、は、は、さらぬだに平生の無愛敬に腹立まぎれの女ども、こゝぞと前後左右より取り附いて、世間知らずに肥え太りし身を摺り寄せながら一時に白粉臭き銚子三個四個を鼻頭へ突き附けられし長右衛門、生涯こゝに始めての苦痛、おもはず悲鳴をあけぬ、

「やれ助け舟、たすけ舟」

## 其五十四

むかし佐伯氏長は身材七尺を越えて猛牛の角を片手摺みに抛け殺せしといふ古今の怪力、都より相撲の節會に召されて最手の位を取りしほどの男ながら元來の大下戸、一滴の酒に酔ひ潰されしを十三の女の童に親の仇として寢首を搔かれし凡例、それには

あらねど今この高倉長右衛門も、わづか一二合の酒に盛り潰されて前後左右より白粉臭き女どもの酌に攻め惱まされ、おもはず助け舟くと叫びし體に、神尾老人、座を轉け廻りて打笑ひぬ、

男も男それほどの男が助け舟とは千枚の謝罪證文を書かせたより氣の毒ぢや、さらば女ども暫く立去れと追ひ退けし後、みづからの手前に一服の茶を進めて燈火の下に聲を潜めつゝ語り出しぬ、

「かうなれば萬事、彩る浮世の一片を剥いで、ごろりと心體そのまゝ抛け出しての依頼ぢや、いかに長衛殿、過般、お身に申し入れた迷惑の儀、あらためて今夜、勿論約束だけの事、今とは言はぬが、いづれ男として生涯、いつまでの獨身で居らるゝ、善なし、妻帯すべき時節を待ち受けての上ぢや」

「酒も辛し、それも辛し、實は今宵の長衛、百萬の敵に襲はるゝよりも猶更、苦しう

心得まする」

「や、酒の辛いは、もはや、強ひぬが、それも辛しとは、この事さほど身に辛く思はれての不承知でか、その本人これへ俄に轉居させたは、世にいふ人情の柵でなく義理づくめの柵でなく、こりや外の事と違ひ他の料簡に及ばぬ縁談の儀ぢや、もし心に染まぬものを押附けては行末、却つて雙方のため宜しかるまいとの用意かたぐちと手重に過ぎたかは知らず、いは、餘所ながらの見合ぢや、さるを此の男め、土で作りし鐘、うてど響かざりしとやら、あまりに氣強いぞ、は、は、は、」

「承れば猶更の事、わざ／＼それほどまでの思召、何と申し上げて濟むべきか、まづ兎も角も御承知の二十五人、あの者どもに對しての一埒あいて、身の安穩になりまするまで、その上、あらためて確と、御返答いたしたい、またそれがため日夜、いつ何時、いかやうの事あるも知れぬ長衛が壁一重の隣屋へ、女儀ばかりの住居さ

せられまするは、聊か心得ぬ事のやう」

「いや／＼、其儀に就いては心配無用、前役の御威勢を偷むやうなれど、あの二十五人、この黒門横町へは一切、うかく／＼足踏みもならぬやう、幸ひ今の町奉行は見習の頃この老爺が仕込で加之も推舉した弟子同然の間柄、内々うち明けて公然は町方の騒動を防ぐため、彼等が宿所を探り當て、與力同心の目鼻を配らせ置いた其後は、一人も立寄り得ない筈ぢや、但し二十五人の外、別に二人の勝手活動ありとやら、其奴の宿のみは日々に轉々いたして、まだ知れざるよし、なれどお身として二人の青二歳、こりや捨て置いてもの事、は、は、は、」

長右衛門、おもはず酔眼くわツと見開いて膝を押し出しぬ、

「やれ、お情過ぎました事、身を恐れて江戸歴々衆の御内助を願うたといはれては、

この男」

「いふまい、其邊に如才ない事、たとひ萬一の過失ないにもせい、まだ世にさへ立たぬ部屋住の奴原、二十五人を相手にするよりは、幸ひ近々のうち、會津殿が參觀として江戸屋敷に來らるゝ筈ぢや、その時こそ生涯一度の男振、こりや天晴れ面白い働き甲斐があるぞよ、この老人また死際に一花の返り咲、會津殿ぢきくゝと相手とあらば随分、内助は儲置き、名乗りがけての力になりたい、はゝゝゝ」

長右衛門、いよく迷惑の満面を皺めつゝ、さても入らざるところへ思はぬ無用の情と力を添へられたる體、堪へ兼ねる酒氣を吐くにや、ほつと溜息を洩らしぬ、

## 其五十五

性來の好まぬ酒を強ひられ、心にもない妻を強ひられ、加之も入らざる邊に思はぬ情の過ぎたる迷惑、無用の力を案外の的にまで添へられて、うかくすれば千石を捨て

て其の日の土鍋飯に浪人腹を凌ぐ甲斐もなく、舊恩の君に對うて獅子身中の蟲となる恐れあり、もはや酒席一應の言葉にては叶はぬ業ぞと、其場を下戸の大醉に紛らしながら、そのまま、辭して座を起ちぬ、

軒竝びの隣家なれど夜は更けたり身は酔うたり、下僕に送らせんとするを、いや手探りに三歳兒の如く這うても無事に届くべき五六歩の門口、御無用、御無用と二聲高く残して、女どもの持ち出す燭臺の餘光に背後を照らされながら、靜に立出でて我家に入らんとする折しも、ふと足下を見れば、ほつと軒下の闇に蠢くもの、

酒に盛り潰されし下戸の高倉長衛は敵なき座席の事、門外一步を踏み出せし高倉長衛は脚下も踏かず、提刀の腰を捻りつゝ、そろりと退りながら、軒端の外れ口より星影に睨み込みぬ、

「何者」

聲もろとも大地より吹き出す泥水の如く跳ね揚つて、胸元に組み付かんとする奴、掻い掴むや否、身を沈めて抛け出せば、またもや跳ね起きて飛び込み来るを抜打の早業、すつと斬れば、ばたりと地響うつての聲、

「川上傳太郎ぢやッ」

南無三、斬つたぞ、我家に燈火なければ其のま、隣屋へ走せ戻つて、提燈や行燈と叫びながら、まだ我を送りし燭臺の其處にありしを取つて出づれば、さつと夜風に消えし後より、たゞならぬ體に急いで持ち出でたる下僕の提燈を奪ふや否、駈け寄つて見れば、死なしたり殺したり、加之も五體を躍らして飛び込み來りし勢ひと刃風を鳴らせし抜打の勢ひに、いかで堪るべきや、あはれ右の肩口より左の脇腹へ大袈裟の一太刀、はや既に蟲の息なり、

長右衛門、抱き起して耳に口、忍びながら、音太き聲を吹き込みぬ、

「いのち、生命は無うても天晴、たしかに武士は立つたぞ」

涙の聲を吹き入れながら、ふと見れば右の拳に握り詰めたる九寸ばかりの七首、やれ憫然や捨身に組み付いて刺し通す心なりしか、せめて太刀打ならば斯くまでの早業に及ばぬもの、一命だけは助ける寸隙のありしにと思はず提燈の火影に照らして、肌には届かねど我が袖の貫かれしを見るや否、また忽ち耳に口、

「無駄死ではない、長衛も一刺、やられて居るぞッ」

折しも狼狽へ騒ぎし下僕の聲に、走せ出でかゝる神尾老人、

「や、曲者か」

長右衛門、振り返りながら片手をあげぬ、

「怪我人、怪我人」

## 其五十六

あれほど前後の理詰に事の本来を説いて諭せし上は、たとひ面に聞き入れずとも心の底に會得せし筈、よもや叶はぬ我が白刃の下に無用の犬死すまじと思ひしに、聲さへ出さぬ脚下の闇より飛び付いて、いはでも知るべき抜打の一刀にならんとは、加之も晴がましき白晝の太刀打には、なまなか顔を見知られて助けらるゝが見苦しとや思ひけん、わざと人知れぬ闇に身を潜めながら、聲さへ立てぬ不意の無言に飛び來りしは九寸の七首に我を刺し通すか、我が二尺八寸に生命を取らるゝか電光石火の間一髪に運命を抛け込みし心體、思へば猶更ら哀れに優しく勇ましき男、まして兄は君がために無體の手討となり、弟は我がために不意の屍となる、さても何の因果そ、兄弟もろとも打ち揃うて斯かる最後を遂ぐるとは、

わけて今年やうく二十一、花も實も將來これよりといふ可惜ら行末の身を、いかに覺悟の上とは言へ、人にも唄はれぬ闇の捨死として、叶はぬまでも君命を果せし志の健氣さ、

さても我、おもへば西川兄弟といひ、この川上傳太郎といひ、かくなるべき運命にさへ出逢はずば、生涯そのまゝ手を携へて交はるべき筈の男を退くに退かれぬ敵として、加之も三人もろとも我が白刃の下に打ち果せし罪の深さよ、

せめて世に憎まれ人に持て餘さるゝほどの奴原を一團の敵として、日本晴の野原に飛鳥の如く平生の手練を盡しながら、思ふが儘に立働いてこそ、武士が鋒銃の業として男冥利に叶へど、あはれ何事ぞ以上三人いづれも涙の種、我身を鐵火に焼き切るより一入さらに苦しき悲惨を忍んで、月に葬り病に痛め闇に殺せし高倉長右衛門、この上の白晝また如何なる敵に遭ふやらと、流石の大膽不敵も案外あまりの不思議さに、お

もはず總身ぞツと寒し、  
 幸ひ二十五人の討手いまだ一人も手にかけてねど、これとて襲ひ來れば其のまゝ逃げ出  
 さるべき我でなし、武士の意氣地として一刀の手前、いづれ身近く飛び來る奴より斬  
 り竝べて、加之も其の果は猶更舊恩の君に幾層倍の憎しみを受くべき我、そもく何  
 の不運に生れたるか、

## 其五十七

曉の空を打ち破りて會津の城の櫓に鳴り響く太鼓の音、搦め手の森影より旭日に向  
 うて塙を飛び去る群鴉、やがて追手の門前に織るが如き諸士交代の雑沓、その中に一  
 人、さのみ平生は人に唄はれねど今日に限りて何とやら一際目立ちし田島勘作、麻上  
 下の姿に足を早めぬ、

「や、田島殿、いつ歸國せられた、あの節は俄に不意の御出立お見送りも致さぬが、  
 あとにて委細の傳聞、さてく天晴の御所存ぢや」  
 「他の衆いかゞ召されたぞ、お一人がたゞお一人で一味に眞先駈の御歸國、こりや定  
 めての御手柄、お祝ひ申さいで済まぬ儀ぢや」  
 「さほど耳朶も大きく見えぬに、さて武士は膽と業、やれ羨ましいぞ、かねてより宙  
 に迷うた御褒美の千石、ころりと今日の懷中へ轉け込みましたな」  
 「加之も相手が相手、あれほどの怖ろしい相手に向うて、ふしぎや一箇所の手疵も負  
 はれず歸國勿々かく無事の御登城とは、よくくの御武運、ことし一年の千石だけ  
 は弓矢神への供物と高倉への回向料と我等への總振舞、こりや遁れませぬぞ、は、  
 は、」

前後左右より持て囃されて、田島勘作さらに一言もなく、たゞ慇懃に目禮しながら、



無言のまゝ、走せ入りつゝ、其日の當番重役まで届け出でぬ、君に言上の前、まづ詰合の重役席に召出されて、歸國の仔細を問はれぬ、  
 「他の御用とは違ひ格別の事、さぞ御苦勞でがな、まして殿様平生の御氣性も知らるる筈の今日、一味の衆に先立ツて斯く俄の歸國されたは、いづれ定めて御機嫌に叶ふ筈と存するが一應、その仔細を我等まで承知いたして後」  
 田島勘作、靜に頭をあげて座を進めながら、容を正しぬ、

「最初お鑑定に叶うた二十五人の衆を差置いて、わがまゝ、勝手の儀を願ひ上げ、今日また二十五人の衆に挨拶も致さず、おのれ一人の料簡にて不意の歸國、實は高倉長右衛門の生首一個よりも幾百倍、恐れながら殿様御身分の上に就いて、大切なるものを持ち歸りました田島勘作」

「や、猶更以ての事、是非に我等まで一應、そと申し聞けられたい」

「自然これまで外役の御奉公勝に勤めましたるもの、わけて御前體に不案内の勘作、仰せなくとも一應お耳に入れて後、御執達を願ふべき筈ながら、あまり恐れ多い事さて此の儀ばかりは」

「こりや不得心な事をいはるゝぞ、たとひ如何やうの儀にも致せ、不肖ながら重役の我々、時には御口眞似も仰せ付けらるゝほどの我々へ、何のために隔心がましい事を言はるゝ」

「もし田島勘作、ぢきく御前への言上ならぬとの仰せならば、儲それまでの事、このまゝ御暇を願ひまする、重役の御方と役向の輕重、また身分の高下こそあれ同じ殿様の家來、まして席上お目通りの叶はざる卒でも御坐らぬに、や、武士は廢め申した、御奉公これかぎりぢや」

いふや否、さらに何の會釋もなく、すつと其のまゝ座を起ちぬ、

## 其五十八

會津加藤家の初代には絶えず武者押稽古の音響を漏らせしが、今こゝに二代目の城中よりは夜更けて後の絲竹管絃を漏らして、金谷園裏の春も諺ならず、眼前の酒池肉林に飽く時なく、今朝まだ醒めぬ例の大醉に枕の上らぬ明成、やうく日の高く射し昇る頃、臥房より起き出でて朝食の膳部に箸は取らねど、下世話にいふ迎へ酒とやら、また盃を手にする底ぬけの顔色、

をりしも大小姓をもて伺ひし重役の一人、次の室の闕際に頭を埋めて平伏の體、明成じろりと見遣りぬ。

「押しての伺ひ、何事ぢや」

「は、先達て二十五人の部屋住どもを江戸表へ御内用の節、格別の思召にて同時に御

用を仰せ付けられましたる田島勘作、昨夜深更の歸國、今朝、まかり出ましたる儀につき」

「や、田島勘作、まかり歸つたか、以來日數も立つに何を致すやら、絶えて働きのない奴ども、實は近々に呼び戻して新手を差向けんと思つた折柄ぢや、さるを其うちより一人、勘作、手柄して来たか」

「恐れながら、勘作め、申し上げます儀は、御内用の高倉長右衛門が首級、たゞ一個よりも、幾百倍、御大切のものを持ち歸りましたとの事」

「何、長衛が首級よりも幾百倍、さらに大切の品とか」

「その儀を一應、聞き取りましたの上と、いかやうに説き諭しても始終の一徹もの、ぢきくの言上、もし叶はずば御奉公いたし兼ねるとまで」

「む、異なる事をいふ奴、但し自己の料簡、よくの事でがな、これへ通せ、その

まゝ呼び入れい」

「は、萬一、御機嫌を損じましたる節には、以上の次第」

「其方どもの念は届いた、勘作ばかりの事ぢや」

やがて案内に引かれながら、入側の鞘室際に迂り入りし田島勘作、伏したるまゝ身動きもせず差控へぬ、

「勘作、當用の長衛が首級よりも大切の一品、持ち歸つたとやら、面白いぞ、その品これへ出せ」

「はッ、恐れながら其の一品、謹んで御覽に入れまする前、何卒、御前お小姓衆へ暫時、御遠慮を仰せ付けられたう、願ひ上げまする」

「人拂ひしてまでの品か、や、兎に角、皆のもの立てい」

明成、おもはず座を乗り出す心地、まだ酒氣の残りし眼を見張りて無言のまゝ打守れ

ば、伏したる田島勘作、天井より絲筋に操らるゝ如く次第の額越に頭を擡けて、果は振り上げし面體に輝く一念の眼光、射るが如し、

## 其五十九

當の仕手に向うたる二十五人いまだ何の音沙汰のないに、横合より飛び込んで討手を願ひ出でたる田島勘作たゞ一人、高倉長右衛門が生首よりも大切の一品を持ち歸りしとの言葉、加之も御前ぢきくならでは申し上げぬとの事に、君側の小姓まで追ひ拂うて平伏の頭をあけし面色、

城主明成また思はず眉を顰めつゝ、座を乗り出せし大兵肥滿を膝頭に支へながら、例の猛氣に迸る一聲、斬るが如し、

「勘作、すいと進め」

「は」

「その一品、これへ出せ」

「恐れながら、只今も申し上げましたる通りの事、汚らはしき長衛づれが生首の鹽漬とは違ひ」

「添口は入らぬぞ、早く出せ」

「は、實は小身の田島勘作、わけて不肖のもの、不調法の性質が、これほど身に取つて過ぎたる大切の御品を、もしや道中にて萬一の紛失あらうかと、日夜さらに一睡も仕らず、苦心のあまり、人知れぬ内々そつと腹中に藏めて、馳せ歸りましたる次第」

「む、何といふ、身に過ぎた大切の品のゆる腹中に藏めて來たとは」

「勘作め、もはや腹中に藏めましたる以上、とても此のまゝでは御覽に入れやうもな

い事、つまりは一命を差上げて後、始めての御合點、さては此物かと仰せらるべき品、あはれ願はくは御不用の御佩刀もて、一突、たゞ蟲の息だけ暫しの間、通ひまするやう御手加減の一突、鋒鋦を賜はらば其の血汐もろとも、腹の底より自然に流れ出まする筈」

きくや否、さらぬも炎々たる猛火を包むに等しき明成の天性、じろりと勘作の面上を睨みしが、いまだ醒めざる前夜の酒氣ほつと薄赤き眼中に猶更ら物凄き光輝を添へて、もとより音に聞えし大兵の大力早業、たゞ一握みに捻り攪んで庭前へ抛け出さんばかりの猛勢、おもはず脇息を音高く拳に打ツて、つるりと蓐を乗り出しぬ、

「勘作、狂氣いたしたか」

はつと恐れて頭を伏すべき筈の田島勘作、今は五體寸分も動かず、一入さらに容を正して木像を押据ゑたるが如し、

「折角これまで持参いたしましたる品、もし御手を下されずば、どの道いづれ御機嫌を損じまする勘作め、偏に御免を蒙り腹十文字の上、御覽に入れたき存念にて」

「や、おのれ、いよく狂氣ぢや、さがれ、退れッ」

「會津四十萬石の木の根に生いた螻蛄一匹に等しい、この勘作風情の狂氣沙汰は諸置き、御痛はしや加藤家二代の君こそ、正しく御狂ひ遊ばされし體」

「うぬッ、進め、手を下れるぞ」

「はッ、はッ」

田島勘作また、きもせず五體を押据ゑたるまゝ、機關人形の如く進み出でぬ、

## 其六十

晝がける阿修羅の如く自然の毗裂けて、當時天下の諸侯中比類なき六尺肥滿の大力早

業、加之も天性の猛氣は鐵壁を踏み抜くに等しく晝夜間斷なき酒氣紛々として猶更ら怖ろしき明成の面前に、いやしくも小膝を進めて口を動かすほどの臣下、いづれも手討にせられしか立退きしか、今は會津城中たゞこれ獅子吼の前の鼠に似たる折柄、じろりと睨まれて仰ぎ見るもの一人もなき其の中に小身の田島勘作、不意に江戸より走せ歸りて重役を欺き近従を追ひ退けつ、君前に近づきし後、高倉長右が生首に百倍増の一品この腹中にありと叫びしのみか、果は真正面に頭をあけて狂氣呼ばはりせし體、いはでも知るべき五體寸分に切り刻まるゝは固より覺悟の前なり、

「恐れながら今日、この勘作が會津城中に於いて御手討の最終」

「いはせも果てず滿面烈火の明成、ぬッと起ち上ツて、はや一刀の柄、

「や、おのれ、わざく、鬪取の外より進み出て討手に向ひながら彼奴の生瓜一枚も得剥がず、のめくと狼狽へ歸つた臆病腹に、何がある、頭を摺ツて出い」

勘作、はツと答へて更に怖る、顔色なく、ちか／＼と明成の脚下へ這ひ寄りぬ、

「高倉長右いかに剛の者たりとも會津四十萬石の御威勢より馳せ向うたる二十餘人い

まだ手足も出ざるは、これぞ正しく御武運の末、せめて瞬間の御容赦を賜はらば、

その仔細、いち／＼申し上げたき勘作ながら、もはや御機嫌を損せし今こゝに叶は

ぬ事、たゞ一言この腹中に藏めて歸りましたる一品は、あはれ二代の加藤家滅亡の

前兆

聲も終らぬ拔打の早業に田島勘作が肩の根際より右の腕一本すつと斬り放されて倒れ

んとせし五體、そのまゝ左の片腕に支へながら、かくても一念、おのれが血潮に座を

保ちぬ、

「いづれ召さるゝ一命、さらに、さらに御恨み、申し上げぬ勘作、たゞ悲しきは、亡

國、亡國」

またもや無言の一刀に枯枝を斬り下すが如く、やう／＼支へし左の腕を打ち放されて、  
どツと前に伏し倒れんとせし胸板を大力の片脚に蹴飛ばせば、ころ／＼と血達磨の如  
く轉び行きて鞘間口の杉戸に音高く當りながら、なほ蟲の息の通ふにや、幽に聞ゆる  
念力の聲、

「亡國、亡國」

明成、血刀を提けたる仁王立のまゝ、じつと勘作が息の根の絶えて動かすなりしを見  
定めながら、まだ残る憤怒の眼中に猛氣を含んで傍を振返れば、この物音に悸き恐れ  
て出でも得やらず、たゞ障子の影に平伏せる近従三四人の體、

「此奴の死骸、取捨てい」

聲もろとも腕に餘れる殺氣の一刀を空に打ち振れば、ぱつ／＼と障子に血汐の霏、そ  
の影に頭を伏並べし面々、生きたる顔色なし、

「急用ぢや、當番の物頭を呼べッ」

## 其六十一

兩腕を二太刀に斬り放し胸板を太力の片脚に蹴飛ばされて、二間あまりの杉戸際まで血達磨の如く轉け行きながら、まだ絶えざる蟲の息を吹いて幽に亡國亡滅と叫びし田島勘作の一言、目に見ぬ障子を隔てゝさへ小耳の穴より腸の底に骨寒く染み渡りし近従ども、猶更ら顔色を失ひつゝ、恐るゝ其の死骸を取片付けんとなれば、あはれ斯くなるべき覺悟の懷中より死役の諫書一通あらはれ出でぬ、その一書を重役に差出せど、重役の面々また後難を恐れて誰一人そのまゝ君前に捧ぐるものもなく、内々そつと火中に投ぜし加藤家の運命、ましてや田島勘作こゝに苦忠の甲斐もなき犬死の亡魂、いかに無念の夜なく、會津の空を迷ひけん、

さらぬも血を見れば天性の猛氣いよく堪へ難きまで五體に漲る明成、衣を更へて座をうつすや否、忽ち大盃をあけて酔眼ますます輝く面前に當番の物頭五人を呼んで呻るが如き聲、

「あらためて其方どもへ確と申し置くぞ、もし、あの長衛が討手を差向けざる以前ならば兎も角も、はや今日の場合、いかな事あるとも一切の諫言がましい事、ならぬぞ、きかぬぞ、ついでには二十五人の奴原、其後どこに性根を取失うたやら無益の腰拔ども至急に呼び戻せ」

「はッ、呼び戻しましたる上、いかやうの御處分」

「彼奴等に祿を呉れるは大海に苗を植うるの諺ぢや、犬猫を近づけるとも生涯の出仕無用、親兄の家を嗣ぐ事、まかりならぬぞ、但し長衛めは猶更ら其分に捨て置きぬ奴、まして今日この勘作が體、さては討手の委細を内通するものあつて逆に捻り

使はれたと覺ゆるぞ、會津四十萬石の主人が、舊臣たゞ一個の浪人首を得取らいで  
 武門の威勢が立つか、この明成もし向はゞ一握みの手取にしてくれんもの、世上の  
 外聞は儲置いて、長衛めの手前もある事、平生の忠義は入らぬ我への奉公振こゝち  
 や、わけて近々に參府の折柄、なほ以て身分に構はず誰れにもせい、出直して討取  
 るものを申し立てい、物頭を勤むる其方ども自己が支配下に立働く朝夕の脛腰、こ  
 れならばといふ奴を知る筈、知らいで濟まぬ筈の役向、内談に及ばず銘々の鑑定通  
 り、今こゝで名指をして見い」

「はッ、はッ」

「いざといふ曉には戰場に馳せ向うて一方の人支配もすべき筈の其方ども、よもや  
 加藤家の恩祿を食む幾十人中に高倉長右衛門たゞ一人の生命を取替の仕手もないとは  
 申すまい」

「は、は、は」

「但し萬一、無いといはゞ詮議の入らぬ事、他を差置いて面前の申付ぢや、物頭の其  
 方どもを討手に向けるぞ」

油斷大敵、すはこそ頭上の落雷、もはや他事ならぬ我身の絶體絶命、うかくする場  
 合にあらずと、五人の物頭おもはず顔を見合せながら、そのうちの音頭取一人やうや  
 う頭を擡けぬ、

「恐れながら申し上げます。高倉長右衛門こと、母の胎内より武邊修行いたせばと  
 て今年、わづかに三十一歳、まして御威勢の下を離れし後は猶更ら身の倚る邊もな  
 い素浪人の境涯、いかに若輩とは申せ二十五人の手を無事に脱るゝ業も工夫もない  
 筈、さるを彼いまだ今日その首の胴にあるは、よくく不思議の武運に叶うたる男、  
 もはや世間普通なみくくの仕手にては逆も覺束ない奴、この上は強弱詮議の誰彼



よりも従來の場數もの。たとひ頭に白髪を戴くとも物馴れたる古兵でなうては所詮、彼の相手になるまじきやう心得まする」

「む、其處ぢや、その場數に物馴れた古兵、誰と申すぞ」

「は、先年、御不興を蒙りし節、知行を召上げられて三人扶持のまゝ、當時は御城下の町外れに浪人同様お見捨の老爺、久世弘藏、ことし六十の坂を越えながらも太刀筋は昔の男、わけて長衛がためには劔道の師範も致せしもの」

「や、面白いぞ、あの老爺いかにも其道には覺えの達者ぢや、それ呼べ、もし仕終せたらば改めて先知の倍增、子息めも取立ゝて遣はずぞ」

「どこが不思議の武運に叶うたる男ぞ、あはれ高倉長右衛門、自己がためには三尺の影も踏まざる昔日の恩師を討手に差向けられんとは、あはれ久世弘藏まだ六十一の白髪を戴いて、我がためには出藍の名譽ある昔日の門弟が仕手に選み出されんとは、勝敗

いづれにせよ、かくと聞かば師弟もろとも白刃の血よりも先づ涙の血汐に泣くべし、

## 其六十二

元來これといふ罪ありし身でなく、たゞ酒宴の席上に何とやら不興氣の面色、あの黧面が目觸りとして其のまゝ、出仕を差止められ子息の弘一郎に小鼓の稽古をせよと命ぜられし時、いまだ武士相應の修行さへ半も届かぬ若者に御無用の仰せといひし一言、や、おのれ主の指圖に反く奴として忽ち四百石の知行を召上げられ、やうく渡り奉公の下郎に等しき三人扶持にて城外へ追ひ拂はれたる久世弘藏、ことし六十四、あはれ朝夕の手を携へて水魚の如く先君に仕へし友朋輩、いづれも幸福の無事に先立ちて、残るは諫死の手討にせられ偕は涙と共に他國へ立退きつゝ、今は秋の末に枯葉寂寞の自己のみ、空しく六十四の白髪を戴いて惜しからぬ餘命を保ちながら、せめて

は加藤家の成行を見届けんとの心體、うき世に心易氣の浪人とも得ならで、町外れの茅屋に父子たゞ二人の侘住居、

をりしも俄の君命、至急に登城せよと傳へられて、おもはず老の眉を顰めながら、さて斯くても主従の間柄、時をうつさず禮服用、まづ城中の重役が詰所へ出頭すれば、そのまゝ御館へとの案内に引かれて奥深く進み入りし一室のうち、平生に似氣なき微笑を浮べし明成、あらためて其方への内用、あの高倉長衛を討ち取れと聞くや否、さしもの久世弘藏、はらくと六十路の兩眼に涙を流して其場に伏しぬ、

「や、今日まで打ち捨て置いた其方、わざと呼び寄せたを身に取つての冥加と思はぬか、いはゞ用ない白髪のお老耄ながら藝に依つての一徳に選ばれたを本望と心得ぬか、但し私の師弟は公の君臣よりも重いと申すか、確と返答せい」

たゞみかけて隙間もない例の大聲を頭上より浴せられし久世弘藏、南無三寶、さても

情なや、おめく生きて嘴の黄なる小人原がため斯かる苦しき老の瀬戸際に突き落されたりと、赤く光りし禿頭に數ふるばかりの白髪頭、力なげに打ち上げぬ。

「今を盛りに數ある御家臣中より、世に後れて萬事に狼狽勝の老耄が、かく大切の御内命を蒙りまする事、は、は、死晴の返り咲とも心得まする儀ながら、さて御覽の通り久世弘藏、本年六十四歳、いかに心ばかりは御奉公この時こそと、なれど、脛も腰も昔日とは違ひ、業は固より目も霞みては、つまりは唯、たゞ御機嫌を損じまするのみの事、わけて高倉長右衛門、彼が十四五歳の頃この弘藏、聊か劍道の指南も仕り、實は其時さへ世に怖ろしき自然の太刀筋と、舌を卷きましたるほどの奴、それが其後さまぐの諸流に渡り合うて鍛錬の今日、ことし三十一の曉と申せば迎も老耄の手際に叶はぬ相手、第一また見苦しき白髪老體の死骸を江戸繁昌の巷に曝しましては、恐れながら加藤家に年輩相應の討手ないかと、入らざる世上の

取沙汰もあらう事、願はくは他の若き人々へ仰せ付けられたく、この老耄め、偏に御免のほどを」

一旦かくと言ひ出せし上は鐵砲の火蓋を切りしが如く、是非曲直もなき横紙破りの明成、頭を左右に打ち振って一入の大聲、

「それほどの事、わざわざ其方に教へらるゝがため今これへ呼び出したと思ふか、弘藏、頭をあけて進め、進め老爺」

其六十三

久世弘藏、あはれ六十四の白髪頭を打ち伏して、老の兩眼に涙を浮べながら、いかに辭すればとて願へばとて、一旦その口より斯くと言ひ出せし明成の天性、果は膝頭に座を叩いて例の癩癖、むらくと額に筋を現しぬ、

「もし白髪の死骸を江戸繁昌の巷に曝して加藤家に年輩相應の討手が無いかと笑ふ奴あらば、素浪人の瘦首一級、加藤家に於ては當時不用の隠居仕事で済む筈と言ひ破るぞ、もはや今年六十四の其方、やうく生きて三年か五年か數の知れたる生命さほどに惜しくば此のよゝ退れ、老いても自己が身の面目の子息のために舊高倍増の家運再興この時と思はゞ潔く返答せい、老爺、どうぢや」

久世弘藏、苦しけの大意、ほつと吐いて白髪の禿頭を擡けながら退くに退かれぬ老の膝節、すつと進めぬ、

「いかに仰せらるゝとも、他に人々のある事、此儀ばかりはと存念を固めましたる老爺ながら、やうく生き伸びて三年か五年か數の知れたる死際の生命、さほど惜しいかとの御一言に久世弘藏、もはや何事も申し上ぐべき言葉なく、たゞ謹んで御受け仕りまする、こゝに師弟の昔情を忘れて君命の重きを蒙りましたる以上は、

たとひ長衛が生首、みごと御覽に入れませうとも、これがために舊知倍増の思召は御無用の事、もし下さるゝ御褒美とあらば、恐れながら外に一事」

「む、何事ぢや、實は先達より仕手に差向けた二十五人の者ども、いづれも脛腰ひん抜けて物の用に立たぬ折柄ぢや、憚りなく申せ、聞き入れるぞ」

「は、ありがたき仰せ、さりながら華奢風流の御使者とは違ひ、武道に不案内なる當世出立の若殿原、二十五人は儲置、いかほど御差向け遊ばさるゝとも、元來の大膽と申し自然の不敵さと申し、業は固より不思議に得たる其道の逸物、あの高倉を何として、多ければ多きだけ猶更、味方に人依頼の油斷あつて彼奴には案外の僥倖、とても叶はぬ筈の事、但し久世弘藏、今かく申し上げては言葉に前後不揃ひの恐れあれど、幼年の頃より先君の御側に仕へまつりて、大事の場所にも二度三度の御用を承りしもの、年こそ老いたれ、彼が如き大剛の男に立向ふ仕手の工夫も聊か心

得ましたる老爺、やはか敵を無事に差置いて自己ばかりが路傍の犬死は仕らぬ覺悟、せめて相討の俱斃れには致すべき心體、つきましては再び生きて御意を得られぬ久世弘藏へ死際の御褒美として、こゝに一事の御願ひは、何卒、あはれ今後、まづ朝夕に先君の御位牌を拜せられて、もとより御禁酒とは申し上げぬ事、たゞ、從來の大酔を御差控へ遊ばされ、また罪のらば罪科それ〴〵御法度のある以上、勿體なや叨りに御佩刀の汚れ、臣下お憎しみの徒輩を軽々しき御手討の儀、は、は、恐れながら偏に御勘辨のほどを、もし此儀を御聞き濟み下されうならば、久世弘藏、うれしく先君へ御通知かた〴〵當年二十七歳の愚息もろとも、父子死枕を並べて御執心の高倉長衛め、たしかに五體満足のまゝでは置きませぬ心體、はッはッ」

ほろ／＼と老の涙を膝に落して、うち伏せし口の中には聲を震はしながら先代の藤典厩が唱名念佛、

## 其六十四

かねて覺悟の前の西川兄弟さへ、今更おもへば何の死晴もなき悲境の最後ぞと心に弔ふ折柄、わざと軒下の黒闇より名乗も得せず抜打の我が手にかゝりて、可惜二十一の花ならば蒼の若氣を散らせし犬死の川上傳太郎、せめての幸ひ神尾老人に貰ひ泣きの涙を流させて、人知れぬ夜中そつと一寺へ運び入れつゝ、あつく葬り懇ろに回向せし後は、猶更ら氣に結ばるゝ田島勘作が事、この末また二十五人に無益の罪を作らで叶はぬかと、流石の高倉長右衛門も何とやら人間の無常を身一個に覺ゆる心地して、暫時そのまゝ浪宅に引籠りぬ、

まして幼少の昔日劍道の指南をうけし恩師の久世弘藏が、あはれ六十四の白髪を戴きながら當年二十七歳の子息を伴ひつゝ、父子もろとも死枕を並べて我に刺し違へんが

ために會津を立出でしとは夢にも知らぬ高倉長右衛門、

わけて其の後は神尾老人への手前、もはや壁一重を隔て、不知顔にも打過されぬ軒並びの苦しさ、そろく白粉臭き女どもに朝夕の出入せられて、加之も絶えず有難迷惑の酒肴を贈らるゝのみか、例の浮世馴れたる四十面め、用もなき不意の不遠慮に襲ひ來りて、心にもない追従輕薄に切り込まるゝ辛さ面倒さ、炊置の土鍋飯に自己が勝手腹を膨らして肱を枕に氣樂三昧の晝寢もせられぬ今日この頃は、外の敵より猶更我が浪宅の脚下こそ物騒の體、またもや以前の如く市中へ出歩きぬ、

さりとして四里四方の江戸市中、どこに誰一人の訪ふべき友朋輩もなく、會津の空は見限つて立退けども、加藤家のあるかぎり他家他門に奉公仕官の道を求むる筈なく、もとより世に連れて榮華のために自己の腕を賣り歩く氣もなく、猶更町人の算勘を見習うて身を安く家庫繁昌の心なければ、いづこまでも此のまゝの境涯に浪々の一身、

ぶらりとして我は我だけの人知れぬ觀念を胸裡に保ちながら、さて面上の太刀疵といひ自然に備はる武者形の男振といひ、往來の人に私語かれ、武士の目よりは別けて不審の眉を動かされつゝ、どれほどの仔細あるものぞと歩を停めて見返らるゝ白晝の晴がましさに、わざと捨てし編笠また打ち被らでは身の看板を曝し歩く心地、やれ出るにも入るにも蒼蠅き浮世と思ひぬ、

一日の夕暮、何心なく我が家に歸りて行燈を引き出さんとせし折しも、さつと往來の格子窓より一封の書狀を投げ込みしものあり、拾ひあけて見れば筆跡に覚えなければど正しく宛名は高倉長右衛門殿の七字、

我等兩人今度改而爲討手差向候、但し舊來御懇意の者故わざと出合次第名乗不申、そのまゝ無言に打込み候、間此段前以而御斷申上置候

實は武士としての本懐、卑怯の振舞に相成、甚だ以而心苦敷また殘念至極に存候へども今日の成行かくの通り無是非事と觀念致居候

其六十五

長右衛門、じつと見詰めたるまゝ、息を含んで思はず小首を傾けぬ、  
黄昏の格子窓より投げ込みし一書の文面に、高倉長右衛門、おもはず眉を顰めて小首を傾けながら、儲これがため喰ふべき時刻の夕飯に一粒たりとも遅速増減のあるべき男ならねば、靜に行燈を引寄せて悠々と半日の空腹に箸とりかけし折しも、また隣屋の手を経て神尾老人よりの一封、何心なく披き見れば、兼て内々その筋に探らせ置きし例の二十五人いづれも俄に本國へ出立せしとの事、

さては投げ込みし一書の當人こそ、正しく二十五人に入れ替りに新たに來りしもの、加之も舊來の懇意、わざと名乗らず出合次第に無言に打ち込めば前以て此段を案内いたし置くとは、同じ二人ながら田島勘作と川上傳太郎の二人よりも聊か手剛く見ゆる奴、また卑怯の振舞に似て元來の不本意なれど、今日の成行かくの通り是非なき事との添書は、猶更武邊の業に物馴れたる性根の圖太き奴、そもく當時の會津城中この高倉長右衛門に對うて以上これほどの先觸をかけつゝ討手に出で來るもの、彼か是か誰なるべきかと思へども、もとより姓名を包んで平生の筆跡まで變更たれば、たしかに何者といふ心の的なし、

數ふれば君を見限つて涙と共に本國を立退きしもの、僅三年の間に前後うちつゝいて六十四人、加之も他家に奉公せしものさへある其中に、いかなれば二君に仕へぬ浪々の我たゞ一人、かくまで執念深く君の御怨恨を受けしか、西川兄弟とて我より進んで

の業でなく、また其後の田島は何とせしやら川上とて不意の拔打に知らで殺せし我、いはゞ聲も立てず目色も動かさで世に忍ぶが如き今この我を、不俱戴天の仇か極悪非道の曲物に等しき追求の御取扱ひ、さても其意を得ざる御無體の思召ぞ、まして浪々以來の我には猶更ら厚く身に沁む神尾老人の恩義さへ、今の境涯より以上の取持沙汰を一切うかと受けざるは舊恩を踏み潰すの恐縮あればこそ、さるを斯くまで際限なき無慈悲の御憎しみを蒙る上は偏に我身の不運、よくく主従の縁なき事、もはや致し方なし、武士の意氣地として何物にもあれ、どれほどの討手にもせよ、いかなる仕手にもせよ、一刀兩斷、この腕節に向ふ奴、この太刀筋に近寄る奴、打ち合ふ刃音もさすべきかと、高倉長右衛門うまれて三十一歳、こゝに始めて見付け次第の敵に我より踊り込んで斬り入る猛勢、おもはず燈火を掻き立て、心試しの一刀すらりと抜き放てば、をりしも隣屋より入り來りし例の四十女、きやつと叫んで氣を取失ひぬ、

## 其六十六

二十五人に入れ替りて新たに討手に來るほどの奴、加之も前觸の案内狀を投げ込んで何處なりとも出合次第に斬り込まんとする奴、わけて舊來の懇意といふからは、この高倉長衛が腕も膽も承知の上の死物狂ひに二個の屍を並べて一個の首を取らんとする奴、志は殊勝ながら、西川兄弟にも、川上、田島の兩人にも生命を呉れざりし我、今更ら容易く爲てやられてなるべきかと、怖ろしや、この大剛の不敵に生れついたる男、さらに其後の油斷なし、

まして今こゝに斯くまで覺悟の討手を一刀兩斷、ものゝ美事に打ち果したる上は、いかに執念深き思召も聊か今後の我に手を置き給ふべし、よし然なくとも再び無用の手柄顔に萬一の功名を覘ふ者なかるべし、一つは餘所ながら舊恩を受けし君への諫言、

一つは眼前に同藩の誼ありし人々への懲戒、また我身に取つては罪なき殺生の仕終め、さらば猶更の事、なまなか打合ふ白刃に入らざる義理人情を含んでは却つて自他のためならずと、いよく決心の底を取堅めし高倉長右衛門、顔色にこそ出さね、猛獸の餌食を待つが如し、

其後は出づる毎には必ず頭髮を梳りて湯に入りつゝ、肌の新調の白襦袢を重ね腹に一反の晒木綿を巻き付け、身輕き衣服を纏うて袴の裾を短く穿ち、目釘を改めし大刀の柄端に編く編笠の紐を掛けながら、紛れもない面上の太刀疵を白晝の雜沓に曝して敵に探さるゝ身が敵を探し歩く心體、一日早く出合はゞ一日早く雙方の埒あくべき事ぞと、悠々たる肩を怒らし寛々たる身を反し、猶更ら絶えず市中の中央を往來して、のそり／＼と歩み出す骨法面魂、一際おそろしげに目立ちぬ、

されど眼中、それかと思ふものにも出逢はず、やれ面倒ぢや待遠しと、わざ／＼其後



は市中の繁華雑沓を避けつゝ、敵に取って打ち込み易き町々の裏外れ、人影うすく往來の淋しきところを選んで歩みしが、例の一書を投げ込みしより十日あまり後、一日の夕ぐれ近き千住の歸途、蓑輪の里も打ち過ぎて金杉の此方、上野の森を打ち仰ぎながら、坂本の辻まで來かゝりし頃、ふと見れば往來へ差出でたる椎の木根方に臙富士の編笠深く憩へる旅姿の武士一人、

長右衛門おもはず歩を停めて、じろりと見れば、その武士また此方を見返りて、うちかけし腰を立て、動く體、

## 其六十七

千住街道の蓑輪を過ぎて金杉の邊り上野の森影といへば、同じ江戸ながらも市中に遠く往來の人聲うすく、まだ残る村名の在家ちらほらと加之も夕ぐれ近き田舎道、その

坂本の小高き丘より差出でし椎の大木の根方に腰うちかけつゝ、はや日は傾き夜露には早きを臙富士の笠深く憩ひし旅姿の武士一人、いかでか此頃の高倉長右衛門が目に見遁すべき、

おもはず歩を停めて、じろりと見れば、その武士また思はず身を起して、歩み出さんとする編笠の動き工合、さては紐を解いて頭に載せたるばかり、いざといは脱ぎ捨てる用意ありと知られぬ、折しも互に隔てし其の距離は十間あまり、

つかくゝと歩めば、のそくゝと立去りながら、俄に腰邊を探りて何をか物を置き忘れし體、彼方より立戻ると此方より歩み出すと、雙方また元の同じ椎の木影に摺れ合ふ如く行き違ひぬ、

十間あまりを隔て、笠の動き工合に目早く紐の解きしを知れる長右衛門が眼力、まして近づきながら、ちらと見れば、なぎ袖の薄衿を纏ひて野袴に股引脚絆、加之も鼠木

綿の腕差に旅路の小皺もなく、手首は不相應なる太き體、や、鎖帷子を着込んだる奴ぞと、摺れ合うて行き違ふや否、わざと大刀の鐙を相手の腰骨に突き當てぬ、  
「御免なりませ、うかと致せし事」

振返りて目禮すれば、編笠の端に左手をかけつ、無言の會釋、

また其のまゝ五六歩、うしろに氣を配りながら歩み出せし路傍の草叢より、さつと飛び出したるもの、蛙を覘ふ蛇かと思へば分銅を結び附けたる一丈ばかりの苧繩、右の脚首に搦むや否、ぐいと引絞られて流石の長右衛門、横さまに伏し轉びし面上へ同じ草叢より電光石火の一刀、寸隙もあらせず編笠跳ね飛ばして打ち込み來る一刀、等しく太刀風を鳴らして前後の夾撃に斬り下されぬ、

不意に脚を搦まれて倒れし間一髪を雙方もろとももの矢聲に斬り込まれし長右衛門、いかに大剛の男たりとも遁るゝ道のあるべき、あはれ兩斷になるかと思ひの外、ころこ

ろと手鞠の如く三四間を轉け行きながら、すつと抜き放したる大刀の早業、たゞみかけて追ひ來る敵の一人を逆に斬り上ぐれば、あつと叫んで迸る血煙の中より、また身を轉がして彼方へ三四間むくと起き上るや否、残る一人の白刃を飛び違ひの横なぐりに一太刀ずばと斬り込みし、木葉の散るが如く跳ね退いて、もはや大地に根を持つ磐石の體、仁王立に睨めば、眼前に敵の死骸二個血糊を浴びて横はりぬ、

ほつと大息を吐きつゝ、我が身を見返れば、みごと外せしと思ひしに、打ち倒れし瞬間を寸隙なき雙方の鋒鏑にしてやられしか、右の肩口と左の臀に二箇所の手疵、いかにせしや、また左手の小指と薬指の二本を中程の節際より斬り落されぬ、

さても案外の手柄に働いたる奴、舊來の懇意そもく、何物ぞと近づいて見れば、轉けながら逆に斬り上げたる我が一刀のため願下より耳の根際を頭腦まで斜めに割りし無慙の面相、血に染みて誰とは知らねど亂れし白髮の悲惨さ、はて不思議の討手と一人

また此方に横はりし敵を見れば、腰車より臍の邊まで斬り込んだる體、もし肌に着込の鎖帷子なくば胴斬になるべき筈の面相、や、正しく久世弘一郎、長右衛門、おもはず身を縮めて立退きながら、もはや二目と見も得ざる白髪の死骸は父の弘藏、我がためには今日この太刀筋を教へ導かれたる昔日の師匠、あな恨めしや、さてもく、酷たらしき父子の者を討手に差向けられしぞと、悲憤の血の涙もろとも會津の空の方角を睨み詰めぬ、

## 其六十八

いかほどの許し難き御憎しみあるやら、どれほどの執念深き思召あるやら、その剛臆と強弱は儲置いて會津四十萬石の人中より、討手も討手に依りけり、わざくこの高倉長衛がために昔日の恩師を選んで討手に差向けらるゝとは、

まして今年こゝに六十四の脛腰、わけて先君の記念に生き残りし哀れの老人を、當世無用の老耄とて知行を召上げ城下へ追ひ退けながら、今更俄の無慈悲に引き摺り出して、とても遁れぬ我が白刃の下へ刑餘の罪人に等しく投げ込まるとは、さぞや人知れぬ老の心に遣る瀬なき血の涙を含んで、いかに無體の君命を苦しき白髪の頭に戴きしか、さればこそ、わざと例の一書に姓名を包み筆蹟を秘しながら、せめて行末の武運を開くべき二十七の子息を引連れ、何事も昔の夢、今は誰一人に語らふ友もなき老衰の身を引き起しつゝ、父子うち揃うて我に顔みる寸隙もあらせず無言のまゝの太刀打、加之も我、さりとは知らず平生に増しての活動、おもはぬ不意に脚を搦まれて打ち倒れしがためとはいへ、天晴れ尋常の美事に武夫を斬るべき太刀筋を心得ながら、願の下より耳の根かけて白髪の頭腦を瓜の如く逆に斬り割りし見苦しさ無慙さ、また父を

討たれて無念に狼狽へし一子の腰車、それと知らば儲あれほどまでの早業に深くは斬り込まざりしもの、

わけて一入の痛ましきは父子もろとも兼てよりの死覚悟、猶更ら讀むにも見るにも堪へぬは我への芳志、おのゝ懐中へ用意の一書を金子に巻き添へて、

相手方に毛頭遺恨無之候間我等死骸、此の儘御取捨被下度黄金三枚、爲投込料相添候、以上

とありし潔白さ健氣さ、そもく斯くまで優しく馨しく悲哀に打連れたる父子を無益の我が討手に追ひ立てられしとは、

思へば恨めしの君よ、さても無慈悲の思召や無體の御所存や非道の御意ぞ、酷たらしき御振舞ぞ、もし我この高倉長衛に兄弟あらば其の兄弟を討手に向けらるべし、もし親あらば親を其のまゝの仕手に選ばるべし、やれ怖ろしの君よ、

今までは斯くても舊恩の重きを身に荷うて我が境涯の軽きを忍びつゝ、蔭ながら餘所ながら偏に御運の無事繁昌を祈りしが、もはや今日よりは一切こゝに加藤家を忘れて高倉長右衛門いづこの誰を憚り何を心に苦しんで忍ぶべき、求めねど自然の縁あらば時に従うて二君にも仕へん、好まねど退くに退かれぬ場合に随分この上に御憎しみを真正面の胸板に受けて見ん、あまりの事に今は却つて面白しと人知れぬ心の底に冷かなる微笑、

其六十九

讃州高松の城主生駒壹岐守、江戸参観の年限満ちて歸國の道中、東海道小田原の宿を朝露に今日箱根越の旅行列、はや城下の大木戸を離れし頃、山崎の立場茶屋にて先供の同勢が立騒ぐ體、

をりしも乗物を吊らせて馬上の壹岐守、蹄を停めながら何事ぞといへば、あの葭簀蔭

より御行列を編笠越に窺ひし曲物詮議のためと答へぬ、  
壹岐守は當時に唄はれし諸侯中の伊達者、加之も寛活の氣輕き性質、さらに何の思  
案に及ぶ風情もなく、そのまゝ悠々と馬を進めしが、こゝかとはばかりに立場茶屋の軒  
下じろりと馬上より見下せば、編笠を剥き取られて六七人の徒士に引き据ゑられなが  
ら大地に跪きつゝ見上ぐる浪人の面上、いかにも物凄き太刀疵を旭日に照らして猶  
更一癖あるべき面魂、

そのまゝ無言に打通れば、そのまゝ許さるゝが道中の凡例ながら、武士としては金箔  
の估券、浪人には可憐ら捨物、あまり美事の男振に思はず馬上よりの聲、

「いづれの者ぢや、どれへ通るぞ、姓名を申せ」

「は、元は東北の生産、近年は江戸の町住居、申し上ぐるも恐れながら高倉長右衛門

とて幽に其日を送りまする浪々もの、二月以前より塔の澤の入湯に疵養生いたし、

今日、やうく本復、これまで出立の折柄、元來が田舎生育の不作法に御行列の差  
控へようも辨へず、かく御咎めを蒙りまする次第、かぶりもの此のまゝにて罷り在

りましたる儀は、御覽の通り見苦しき面上を憚りましての事」

「その疵は元來、いつごろの疵ぢや、近ごろ養生いたしたとは見えぬが」

「は、お目を汚しまする面上と横首の疵は、久しき以前の古疵」

「む、其の他に新しい疵あるとか」

「聊か二三箇所」

「や、面白い仔細ありけの者ぢや、なるほど左手の指二本も無いの、幸ひ道中の徒然、  
迷惑ながら今夜の宿まで」

「案外の御意、あまり冥加、この不具もの何卒、このまゝ」

「いや〜、おもはぬ野路に名物鷹を拾うた心地ぢや、いかな音が出るやら、その疵に物いはせて見たい、今夜を娛しう待つぞ、こりや者ども手厚う致して取らせよ」そのまゝ、蹄を早めて過ぎ行けば、今更ら去るに去られぬ高倉長右衛門、俄に打ッて變りし待遇に前後左右より促されぬ、

## 其七十

小田原を東天の朝露に立出でて、その日は海道隨一の關所越、箱根の山に傾く夕陽の三島宿、はや黄昏の本陣に馬を繋ぎ乗物を昇き入れ伊達道具を横たへて、いつしか同勢の混雜も靜まりし後は、たゞ門前に生駒壹岐守宿とせる筆太の立札のみ得意顔に威儀を正しぬ、

旅路ながらも残る方なき兼ての用意、本陣の奥深き大廣室に壹岐守が打ち寛いたる満面の微笑、山海の珍味と近従の居流れたる末席には高倉長右衛門が平伏せる體、隈なく照り渡る燈火は輝いて白晝の如し、

「さぞ迷惑でがな、されど武士としては一段の男振その疵が許さぬぞ、加之も紛れない美事の太刀疵、まだ外に新しき近來養生の數箇所ありとは猶更以て見遇せぬぞ、たゞ一場の座興にするばかりでない、ちと料簡あつての事ぢや、さなくとも元來の眉目といひ骨格といひ、無うて叶はぬ筈の來歴を包まぬ聞かせい、や、見れば見るほど何とやら勇ましけに小氣味のよい男、道中ぢや旅ぢや、身の尊卑は入らぬぞ」

「は、いかに御旅中の御慰みとは申せ、いづこの草を敷寝の者とも知れぬ奴が、まして不所存の不具證據を案外の御賞美に預かり、かくまで過分に有難き御意、この浪人ももの奴、たゞ〜冥加至極に心得まする」

「いや無禮講ぢや、じたい其方の疵は身體に何箇所あるぞ」

「お目に止りまする面上、斜めに額際より目鼻かけて願までの太刀疵一箇所、槍の穂に咽喉を突き外されて首筋の横を殺がれましたる一箇所、同じ槍にて脛裏に一箇所、また左の二の腕に刀の鋒銚一箇所、以上の四箇所は古疵、今回、塔の澤にて養生の分は右の肩口に一箇所左の脛に一箇所、御覽の如く左手の小指と薬指の二本を失ひましたる新舊あはして七箇所」

「相手は何人ぢや」

「都合六人、但し其のうちの一人には、幸ひ袖を貫かれましたるのみにて」

「む、其の六人の相手、いかゞ致した」

「そもく、最初の一人、これは何としても儲、叶ふべき筈のない御人、その他は一切無益の殺生とは存じながら退くに退かれぬ是非なき場合、いづれも仕留めまして御坐りまする」

「やれ働き者ぢや、ついては猶更の事、いちくく相手の身柄と其處まで成行の仔細、また其方の來歴、當時の境涯、今後の希望、委しう聞きたいぞ」

「重ねぐの有難き御意ながら、當分のうち、いかやうの御方様にも暫時、其儀ばかりは」

「む、然もあらう、それほどの働き爲て來た以上、いづれ身に取って、外聞を憚る用意專一ぢや、なれど壹岐守には安堵せい、身のため悪しう聞かぬぞ」

「恐れながら、以上の相手とて、拙者めより仕掛けたる場合さらに一度もなく、初太刀は必ず敵より受けて後、二の太刀にて打ち果しましたるもの、よし然なくとも、自己が罪を包む業には不得手の男、身の用心に世間の外聞を憚る調法沙汰は猶更の事、せよと仰せられても出來ぬ筈に生れついた奴、たゞ當分いづ方へも相手の身柄、姓名と手前の來歴所存を申し上げざるは、聊か他に仔細ある儀、さてく當世に不」

似合の白痴者と思召され、此奴このまゝ御宥免のほどを偏に願ひ上げまする」

## 其七十一

おもはぬ小田原の山崎にて生駒壹岐守に見出され、心ならずも箱根越の三島宿に伴はれて、目に見ゆる手疵の箇所と相手の人数を答へし外は、いかに問はるゝとも一切の素性來歴を包みしに、大名と浪人の間には太平無事の今日、あるまじきほどの分に過ぎたる待遇を受けつゝ、加之も山海の美味を盡せる酒肴の後に黄金十枚の目録、其夜は猶更諸士中の上席分に取扱はれて一宿の曉となりぬ、

はや内外の用意も濟み同勢の行列も整うて本陣の立關へ立出でし壹岐守、高倉長右衛門は式臺に跪いての額越、

「御道中いよく御機嫌よく、謹んで御見送り申し上げまする」

「や、きのふ一日、前夜にかけて無體の我儘を申したが儲これも縁ぢや、其方も随分、身を大切に致せ」

「は、有難き御意」

「もし身の便利になる事あらば、いつなりとも本國へ立越せ、相應の助力は取らずぞ、また江戸在勤の節は猶更、近う屋敷へ出入いたせよ」

そのまゝ乗物にうつりて門外まで出でしが、また俄に長右衛門を差招きながら、そつと聲を潜めて私語きね、

「生涯そのまゝの浪人ならば兎も角、それでよし、なれど萬一もし奉公仕官でも致さう時には必ず忘れまいぞ、誰彼よりも、この壹岐守が先口ぢや、夢にも逸物め餘所へ逃げ出すな、無挨拶にて他家の知行取いたさば、生駒家總體の敵手と覺悟せい、ははゝゝさらばぢや」



重ねく、無慈悲の的にせられ執念深き討手を差向けられ、果は我がために昔日の教を受けし六十四の白髪老體を差向けられて、悲惨それとも知らず恩師の父子もろとも打ち果せし高倉長右衛門が心には、たゞ道中一目の縁よく斯くまで打ち解けられて、餘所へ逃けるな逸物この壹岐守が先口ぢやと優しく耳朶へ私語かれたる一言、いかに嬉しく身に染々と徹へけん、

さても酷たらしき君よと悲憤の涙を浮べて會津の空を睨みし眼と、さても奥床しき君よと心地よけに微笑を浮べて過ぎ行く行列と伊達道具を見送りし眼と、同じ身ながら人知れぬ心の情は黑白の相違、

まして男一代、たとひ萬石の高祿をもて召還さるゝとも生きて再び歸れぬ家あり、わけて武士冥利、たとひ一合の玄米を取らずとも喜んで忘れぬ家あり、

## 其七十二

きのふは今日の昔、いづこの里も花は夢、鎮守の森の木葉も秋の末に散り失せて、はや冬の枯枝に朝夕の霜白く、その隙間より幽に會津の城を見渡す西田村の片端、藪蔭を流るゝ水の音さへ淋しげに庭の小石と私語いて、草屋の軒深き門口を戻り馬の鈴の音ちやらくと過ぎ行けば、脊門の裏路傳ひに自己が家路を急ぐ野唄の聲々、猶更物思ふ身に浮世の哀れを添へぬ、

捨て、惜しからぬ足輕奉公ながら、やうく此ごろ習ひ覚えし鋤鍬の手を放すや否、燈火の下に六十近き白髪の禿頭を埋めて、子ゆるに一日の疲勞も厭はず、また孫ゆるに手馴れぬ麥藁細工の小林兵助、その影に添乳の小唄をうたふ娘の小夜を見返りて、おもはず我を忘れし老の微笑、

「や、出来たく」

「あれ父様の大きい聲」

兵助、我子に叱られながら、はッと首を縮めて添乳に睡る孫が寝顔を差覗きつゝ、俄に聲を潜めぬ、

「これ見い、天晴な武士人形が出来たぞ、今夜そつと此のまゝ枕頭へ置いて、翌朝の目覺際ぢや、はゝゝゝどのやうな笑顔をするやら」

「えゝ父様の氣のない、花か鳥でも爲て下さる事か、此子に武士人形を、妾、妾も武士は」

「また白痴けた事をいふぞ、町人の子でさへ男兒の玩具に算盤は持たせぬものぞ、わけで武士も武士、會津四十萬石の武士中でも飛び放れた一流、凛とした人の子に生れた孫ぢやぞ、たとひ假初の麥藁細工にせい、まだく若黨家來の供人形率馬立道具

まで、見事な行列を取揃へて武運めでたう行末の出世を祈る氣ぢや、もし生涯に事のない町人百姓が希望なら其、其孫を置いて何處へなりとも勝手次第、憂苦勞のない安樂な處へ嫁入せい、まだ幸ひ花も二十歳の見苦しうない容貌、さうで無うてさへ蒼蠅いほど縁誌を言ひ込まれる折柄ぢや」

添寝の乳房、そつと放して襟掻き合さず其のまゝ起き直りし眞白の胸前、包むに餘る口惜けの小膝を燈火の影に摺り寄せながら、亂れし鬢の毛も哀れや今日この頃の誰がために色香を作る風情なく、いきくと張り切りし目元に涙の露雫、

「嫁入、父様、この妾を、どこへ、今更ら何處へ嫁に行けとの御言葉」

「やるとは言はぬぞ行けとも勧めぬぞ、なれど鋤鋤の草臥も忘れて、やうく二夜がけの手細工に折角かう出来したものを、此子に見せて下さるなとは何事ぢや、武士人形が嫌で濟む子を持った身か、高が足輕奉公ながら城下を立退いて今この西田村

へ世を忍ぶも、我身を捨て、母子が行末を思へばこそ、武家氣質を見せられぬ孫は持たぬ筈の祖父ぢやぞ、無事に御殿の御意を伺ふより天晴れ浪人するだけの仔細あつて浪人なされた御人ぢや、また何處の里へ行かれても、尾羽うち枯らしたまゝの浪々で朽ち果てる御人と思ふか」

「え、知れたこと、きゝたうもない、いはいでもの事を、それなればこそ、此子を、せめて五歳になる曉、この和子様を抱いて、たとひ何處に御坐らうとも、捜しあてて、お目にかゝりたい一心で、むゝ小夜か、よく育てたと、たゞ一言たゞその一言を聞きたいばかりに」

「いふな、わかつたぞ、もう其上の事いうてくれるな」

「いえ、いはいでか、それほどの父様が此、この妾を何處へ、外の事か、此子を置いて何處へ嫁入せいと」

「あやまる、あやまる」

「あやまられても、父様でも、こればかりは妾の心に朝夕、神様、佛様へ念願かけた妾の心に、それ聞捨にして申譯が立たぬ」

「立つ、立たぬとて父子の間に、じたい何とすれば氣が済むのぢや」

「こゝでこそ父様、つねの希願、妾に、妾に身の暇を、もはや氣が急いて五歳までは待たれぬ、今この和子を抱いて江戸へ、確に御江戸の空、また御顔は一目に知れる筈の證據もある事、よし證據なうても、これほどの一念で、いかな身の難儀すればとて、お目にかゝらいでか」

「やアまた例の難題が始まつたぞ、うかと平生の術に爲て遣られた、はゝゝ、今夜ばかりは許してくれ、はゝゝ」

泣いても笑うても果は其のまゝの父子、そつと餘所を憚る浮世の草屋に軒深く、窓を

打つ木枯の音のみ心ありけに冬の夜の燈火を動かしぬ、

## 其七十三

諺にいふ水入らずの父子、あまり滑かに隔意もなう打ち解け過ぎて、餘所には知られぬ朝夕の内證、つひ我を忘れし怨み顔に小聲ながらの争ひも、あはれや今年やうやう二十歳の思ひに堪へ兼ねて過ぎし情の戀しき女氣と、現在の孫より外に浮世の希望もなく氣を取られし老の一徹さ、そのまゝ泣いて拗ねて物さへ言はぬ一夜の曉方には脊門の枯草に霜は置くとも、互の心に前夜の露も雫もなし、東の窓より旭日影さし入れば、父の兵助一掴みの立米を手握りて裏口に立出でつ此頃の冬空に畦の落穂もなくて我家の軒に囀る群雀を見上げながら、一人の孫が行末めでたう達者に守れよと、心なき鳥類にまで老の情を運ぶ獨り言、

また娘の小夜は思ふ心の春ならねど、いづこの里にも人目に立つべき花は花、その色香を草深き窓越に包みながら、すやく睡る幼兒の寢顔を見返り勝に釜の下の薄煙、さて今の境涯、ありし往時のやうには身を粧らねど、現在その人に對ふが如き風情、朝まづ初炊の影膳を江戸の方角に供へて、そつと兩手を合しつゝ武運長久の念願、わけて一日も早く逢ひましたいが心の山々、やがて我子の目覺めし聲を聞けば、それ父様より下されますぞと、そのまゝ沈頭へ押し直して、持てぬ手に箸を持ち添へる哀れさ、いぢらしさ、もし東の空に浪々に夜更けし後の寢覺め勝なる高倉長右衛門、かくまでせらるゝ父子の情義を眼前に見れば、大地の根を持つかと疑ふ五體あの頑たる鐵骨にも徹へでやあるべき、まして猶更假寢の夢に産み落されしまゝ父の顔も得知らで玉のやうなる我が幼兒を見れば、鬼神も怖れぬ不敵の面魂あの太刀疵に縫はれたる物凄き眼中いかに



「また此奴と脊骨の一打二打、くらはされても儲、言ひ出したいは村外れの垣根越ぢや、どこの野山も霜枯の今日この頃は猶更、あの花め、とりわけ目に瞥らつて人迷はせに咲いた女、たとひ地頭の行列を横ぎる男でも、あの門口を佛性では通れぬぞ、はゝゝゝ」

「いや鬼のやうな目を剥いても叶はぬ證據は、何物の種やら細工やら、城下仕込の肉塊を産み落した女ぢや、まして阿父は物堅い武家奉公して来たといふ禿頭、年が二十歳で片相手の男が無いと思へばこそ、むざくと可惜花の散らし捨て、つひ煩惱に爲てやらるゝが、ありや石地藏の化物と見て置け」

「さア其の片相手ぢや、女護が島へでも吹き流されたか、あれほどの花の色香を、この草深い片田舎へ置き捨てに埋め込んだまゝの一年越、ちらと通うて来た姿も見せぬとは儲々、男冥加に出来過ぎた氣強い奴」

「や、たのまれもせぬ修羅を燃して、これほどの深い餘所の情よりは、得て女氣といふ奴が不思議ぢや、現在その罰あたりの氣強い男面を朝夕、あの美しい小胸のうちで人知れず、をりく戀しい夢の覺めた曉方、そつと泣き居らうぞい」

「せめて其の泣顔が見たい、拜みたい、あの父子に打ち解けて心易うする奴、じたい村中で誰ぢや何奴ぢや」

「城下から引移つて来て二年越の朝夕、出るにも入るにも鼻と鼻とを突き合す此、家數の知れた村中で、どいつ此奴もない筈なれど、儲あの父子ばかりは義理に呼ばれた客室の生花を見るやうで、いつ逢うても笑顔の腰低に挨拶されながら、その挨拶が鋤鎌の百姓交際には固過ぎた挨拶振で、なれくしい野面も出来ぬ中に只一人、近來、ふしぎと親類めいて心易う出這入する奴があるぞよ」

「何ぢや、あの父子へ親類めいて心易う出這入する奴がある、それこそ鎮守の火事か

旦那寺の地震よりも大事、其奴うか／＼村には置けぬぞ」

「や、噂の影法師その其奴め来たぞ、来たぞ、あの田圃路を見い、地の底の黄金でも掘り出す氣か、照ッても降ッても年が年中、仰いだ事のない懐手のまゝ、はゝゝゝ、あの名物男ぢや」

見れば三十前後の大男、この山國の寒天に手織の古拾一枚、あけ廣けたる素肌に雙手を組み入れて、きよろツとせし眼に脇目も觸らぬ自己が脚下の左右を見廻しながら、泥田に踏み入れし破草履も其のまゝの毛脛を内股まで現しつゝ、どこやらに氣ぬけの五體ほツとせし西田村の名物といへば誰も知る白痴の久藏たゞ一人、

「やれ／＼彼うツそり奴か、はゝゝゝ、彼奴なら親類めいた出入は儲置き、狼狽へた月下氷人に手曳せられて夜半の枕頭へ這ひ込んでも氣は揉めぬぞ、安心ぢや、はゝゝゝ」

## 其七十五

同じ足輕奉公ながら親重代の軍役に組み込まれし身とは違ひ、中年より株を買うて勤めし小林兵助、よる年波に辭して去れば誰に憚るところもなく、また娘の小夜とて男手一個に育て兼ねしを幸ひ平生出入の高倉家に召使はれて、その主人が本國を立退く時に世間の人目まだ袖に包みし情の種、この西田村の片蔭に落着いて後、やう／＼産み落せしかは、父なし子とはいへ誰に心を置くべき筈もなく、まして士分の爪の垢にも足らぬ端た給金なれど二十年來の身の冥加を積んで、父子二人に孫一人の行末を過すだけの田畑こゝに求めしといへば、どこに疑はるゝ恐れもなし、

されど高倉長右衛門といへば固より會津の粒選に數へられし一流の武夫、わけて怖ろしき君前の太刀疵を生命冥加の面上へ主從縁切の夕殘に止めしまゝ、加之も本國の立

退際に槍の名を得し大小姓の西川三左衛門が屍を置土産にせしほどの男、その人の家に年來の恩を受けつゝ久しう出入して、美貌の人目に立ちし娘の無妻の身に近く奉公せしのみか、第一は片親の知れぬ孫のため、もしやと思ふ心に餘所ながら其後の取沙汰をりく、城下の馴染甲斐を訪づれて、きけば聞くほどの風聞よくく高く、あはれ西川の舍弟を返り討にせられ、二十五人の面々も手を空しう呼び房されて閉門、川上傳太郎もしてやられしとの事、田島勘作は如此々々の最後、これこそと思ひし久世父子も叶はず枕を並べて犬死せし今は、もはや會津四十萬石の的となりし仇敵、いづれ遁れぬ筈の運命と聞くや否、兵助、はツと驚いて遁け歸りぬ、

顔色にも出さず口には猶更ら言はねど、老の心一個に人知れぬ其後の朝夕、わけて草屋の軒深く娘を戒め孫を抱きかへて、わざと村の人々へは餘所々々しう、たゞ打ち解けて窓越の往來に呼び入れながら憂きを忘るゝ談話相手は、藪蔭の細流を隔て、

家ともいへぬ藁小屋に住める獨住の村名物、罪も報いもない白痴の久藏ばかりへ父子が心易けの笑ひ聲を漏らしぬ、

「伯父御は在家か」

脊門の垣根越に生きたまゝの獄門首を上げて差覗きながら、破鍋を石疊へ振り落せし如き大聲、さては藪蔭の賢人殿と兵助また窓より老の笑顔、

「はゝゝゝ、同胞もない身に幸福な氣の善い甥を持つたぞ、この伯父に何の用ぢや澁茶でも飲まさうか」

白痴の久藏、うツとりとせし三十面に光輝のない目を剥き出しつゝ、的なき背後の方を無心の大手に指さしぬ、

「いや、澁茶よりも祝言酒の用意々々、今あの稻村で心易い友達に聞けば、こゝの入婿になるは乃公ぢやけな」



「は、は、は、祝言には盃事より第一、まづ無うて叶はぬ縁談の媒介といふもの、入るぞよ、は、は、は、」

「その媒介は今こゝへ来る、あの稻村で小林兵助といふ家は何處ちやと聞いた武士を頼まう、こりや面白い」

「さくや否、白痴だけは虚言のない事、は、は、と思ふ折柄、はや門口へ訪れ来りし武士の聲、

## 其七十六

脊門の牆根越より藪蔭の久藏が不意に入婿の催促、幸ひ其の媒介頼むといふ白痴面は呵しけれど、さて身を取って面白からぬ門口へ、はや訪れ来りし現在の武士、兵助、そつと手をもて母子を一室へ押遣りながら、わざと訝かしげに迎ふれば、一僕も召連

れぬ身軽なれど、何とやら平生の權柄を包みし三十あまりの仔細らしき體、

「近頃まで足輕勤務を致した三番組の兵助とやら、や、物いふは初會見ぢやが、をりをり城下で顔は見知り居るが、さて今日は内々、ちと尋ねたい事で罷り越した、さしての支障なくば許せよ」

なるほど見れば見覚えのある面體ながら、どこまでも知らぬ顔の兵助、たゞ慇懃に迎へて座に招じぬ、

「下々の身軽い御奉公いたせしもの、いづれ様かは存じませねど、歴々の御方が、このもはや御用のない足輕風情の流れ落ちました片田舎へ、わざう」

「君側に勤める岡田左内といふ者ぢや、口數を省いて云へば、わけて彼の、高倉長右衛門殿とは幼少より入魂の間柄、勿論其方が父子の身に悪う來たではないぞ、實は兼々、そと漏れ聞いたことのある仔細での、は、は、は、娘の小夜とやら、無事か、また子を

産んだ筈、いふまでもない父子の情愛、世間の人目は兎も角、定めて其後をりく、江戸よりの内通もあらう、長右衛殿、今いづれに居らるゝ」

「いづこに御坐りますやら、父子もろとも久しい間の御恩を受けました方なれど、偕あの御身分を俄に打ち捨て、他國なざるゝほどの事、まして御家來でもない出入もとの下婢風情の娘へ何の御音信が、はゝゝゝ」

「いや、祕すが人情、其筈なれど、外ならぬ長右衛殿の入魂ぢや、第一また其方が娘の小夜に情の種を宿したとやらの風聞、この西田村で子を産み落して育て居るとの取沙汰、誰いふとなく城内へ聞えて其事がため君側に御内議もある折柄、こりや古朋輩への芳志この時と思つて、わざゝ人知れず來たほどの心體ぢやぞ」

「さてゝ有難き思召、身に餘りましての事なれど、あの後は一切何の御音信もないが事實、また小夜あの妊娠は別に其、其主ある事、親の身として父なし子を産

んだ娘の恥辱を祕したさに、つひ世間の人目より、事の故障ありけに見えまするかは知らず、さう仰せられましたは年來の御恩人へ蔭の仇もて返すやうな父子の身、いかにも立ちませぬ實は近々のうち、この村より相應の入婿を取らうかと存じまするほどの折柄」

「や、それにしても本人の長右衛殿が居らぬ事、わけて近來、自然に遁れぬ成行とはいへ、重ね重ねの君の御憎しみも増して今後いかやうの厳しい御詮議になるやら、いは下世話の坊主の衣まで憎い凡例ぢや、ついては我等の耳へ内々、ちらと漏れ聞えたは當時この西田村にある高倉の一子を入質に取つた上、恩愛の羈絆に引寄せて御成敗になりけの風聞ぢや、もし眞實その子でなくば今のうち重役衆の手許まで罷り出て、荒々しう呼び出されぬ前に申開きをするが身のためがな、勿論、さうと聞けば猶更古朋輩の芳志に我等、同道の口添もして遣はさう、的に覘はれた後は

善悪ともに矢を射らるゝぞ、うかく手後れては何の詮も無い事ぢや。

## 其七十七

西田村より城下までは僅に二里、急かすとも半日に往來の道程、まして高倉長右衛門がためこ竹馬の友といふ、その岡田左内が只一人わざ／＼尋ね来て、近ごろ城内の取沙汰さては君前の内議も秘さず打ち明けし上孫を人質に取らるゝ事まで漏らされしのみか、そつと障子の寸隙より垣間見し娘の小夜が、なるほど折々お屋敷へ來られた人の言葉に、兵助、始めて眠前だけは安堵しながら、いよく斯くと聞けば聞くほど猶更の事、うかく後れては逆も叶はぬ父子の身ぞと、そのまゝ岡田左内の影に随ひつゝ我家を立出でぬ、

遅くとも日のあるうちには歸るべき筈、城下へ入りし頃は、やう／＼まだ晝を過ぎし

ばかりの折柄、搦手の堀際なる岡田の屋敷へ伴はれて、まづ掛りの重役まで内々そつと申し入れし後の事と、そのまゝ玄關脇の一室に待たされながら、さて手の届いたる茶菓の待遇を受けしが、今かくと首を伸ばせど主人の歸り來る音もなく、召使の女どもに聞けば何事も知らぬ顔、留守居の若黨に問へば馬の耳に風、いつしか日は傾いて、はや夕ぐれ近き奥の方に燈火ちら／＼、はつと今更不審の眉を蹙めし頃は、ぴたりと正面の大門を閉ぢられぬ、

や、油斷大敵、娘は孫を抱いて村中に力と頼む馴染甲斐もなく我は此のまゝ出るに出来るぬ捕虜となりて、別れ／＼に父子が深いところへ落ち込んだかと、老の氣の猶更ら前後を思へば思ふほど怪訝の雲に包まれ、あるにもあらぬ折柄、いつの間は何處より歸りしか、主人の岡田左内は奥の室にありとて、取次の下婢に呼び込まれぬ、

兵助、ます／＼訝りながら、案内に引かれて入れば、夕饗の膳部に山海の美味を聯ね

し體、おのれと思ふ心で見るとためか、何とやら俄に際立ちし一癖の満面に物凄き笑を  
 浮べつゝ大盃をあけて反身のまゝ、ぬツと差出しぬ、

「兵助、まづ飲め、もやは日は暮れたぞ今更ら急ぐにも及ぶまい、ゆるく萬事は後  
 刻ぢや」

兵助、おもはず白髪しろがの禿頭はげを老の膝ひざもろとも進めながら、かくても慰勲いんげんの額越ひたひこしに見上  
 けて、言葉さへ心のまゝには得いはぬ身の哀れさ、

「よくくの不憐ふびんな奴やつと思召おぼしめしせばこそ、歴々の御身分ごみぶんが半日はんいちがりの御肝煎おんきもいりを下くださり  
 ました段、わけて御禮おんらいを申し上げまする、さて今日の首尾しゆび、いかゞ御坐ござりましたや  
 ら」

「や、随分ずぶん、ぬかりなく氣骨きぼねを折をつて見たれど兵助、叶かなはぬ事は是非ぜひもない、もはや  
 手後ておくれぢや」

「えッ、手後ておくれましたとは」

「加し之かも出る杖くひは打うたれる諺ことわざ、まづ差當さしあたつての其方そのほうは、このまゝ我等われらが許もとへ確しかと預あづか  
 り置いて、雨あめか風かぜか、後の沙汰のちを待まてとの事ことぢや」

あツと驚おどろく兵助ひやうすけの顔かほ、じろりと冷ひやかに見遣みやりながら、火ほ影かげに輝かがく眼がん光くわう、わざと優やさしけ  
 に細ほそめて聲こゑまで俄にはかに低ひくく、

「但たゞし兵助ひやうすけ、脊せに腹はらは代かへられぬとやら、こゝに一事ひとつ、眼前まのあたりの證據しやうこなうては申まうし開ひらき  
 が立たぬぞ、高倉長右衛門たかくらちやうゑんの一子しを産うみ落おしたといふ取沙汰とりざたの娘むすめ、あの小夜さよの至急しきふの婿むこ  
 でも取るか、なれど儲たくその婿むこぢや、今いまが今いま、俄にはかに團子細工だんごさいくに作つくらるゝものでなし、  
 こりや幸さいはひ叶かなうた時ときの方便ほうべんに不思議ふしぎの縁えんと思おもうて、ちと言いひ出だしかねるが、あらた  
 めて、この岡田左内おかださないが妾せまにくれまいか、さすれば誰だれの子こにせい、乳ち呑のみ子ごもろとも屋や  
 敷しきへ引取ひきとつて、實じつは前々ぜんぜんより人知ひとしれず我等われら寵愛おほひの母子おやこと言いひ開ひらいて立たて抜ぬく事ことも出で